兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
永久保存（10－5）

兵庫県文化財調査報告書　第82冊

井根口遺跡発掘調査報告書

―一級河川四斗谷川河川改良工事に伴う発掘調査報告書―

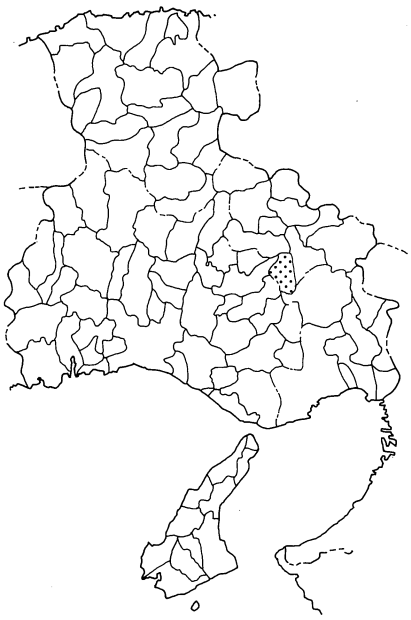
1990

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書　第82冊

井根口遺跡発掘調査報告書

―一級河川四斗谷川河川改良工事に伴う発掘調査報告書―



1990

兵庫県教育委員会

例　言

1．本書は、県単事業一級河川四斗谷川河川改良工事に先立ち、平成元年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した井根口（いねくち）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は平成元年４月に実施した確認調査を西口和彦・別府洋二の両名が担当し、７月～８月にかけて実施した全面調査を村上泰樹・甲斐昭光が担当した。

3．本書の執筆は、本文目次に示している。発掘調査に携わった者のほかに今田町教育委員会の河野克人氏より原稿を賜り、第４章に掲載している。

4．本書の編集は、村上が担当し、細川美千子の援助を受けた。

5．図版に収めた写真は、遺構を甲斐が撮影し、遺物は㈱サンスタジオに委託した。なお、遺跡の空中写真については、写測エンジニアリング株式会社に委託した。

6．本書に掲載した遺物実測図のうち、土器は1/3、金属器は1/2の縮尺に統一し、実測図と図版とに共通する通し番号を付した。

7．土器の残存状況によっては、土器の中心を算出し、180度回転して作図した。このばあい、中心線を一点鎖線で示した。

8．遺物実測図の断面は、土師器は白抜で、中国陶磁器・須恵器・陶器は黒く塗り潰し、瓦器はスクリーントーンを貼った。金属器は斜線で表現した。

9．本書に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の５万分の１「三田・篠山」地形図を使用した。

10．本書で使用した標高値は、兵庫県柏原土木事務所が設定したB. M 5（226.690m）である。また、本書で用いた方位は磁北である。真北は磁北からN7°30′E（昭和57年現在）である。

11．本遺跡の発掘調査にあたっては、以下の方々の協力を受けた。以下芳名を記し、深く感謝するものである。

中野　元、太治英章、上本　護、青木哲哉、久下隆史、高島信之、高島知恵子、河野克人。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯 …… （村上泰樹） … 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の方法と経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 5
第２章　遺跡の環境 …… （村上） … 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　調査の成果 …… 15
　第１節　調査の概要 …… （村上） … 15
　第２節　遺構 …… （甲斐昭光） … 17
　第３節　遺物 …… （村上） … 25
第４章　小野原庄内の遺跡 …… （河野克人） … 43
第５章　まとめにかえて …… （村上） … 49

挿　図　目　次

第１図　調査区周辺図 …… 2
第２図　全面調査作業風景 …… 4
第３図　微地形等高線図 …… 8
第４図　深堀りトレンチ南壁土層断面図 …… 9
第５図　深掘りトレンチ土層断面 …… 9
第６図　深掘りトレンチ掘削状況 …… 9
第７図　弥勒堂と住吉神社 …… 10
第８図　周辺の遺跡 …… 11
第９図　遺跡全体図 …… 13・14
第10図　調査区土層断面図 …… 16
第11図　掘立柱建物跡１ …… 17
第12図　掘立柱建物跡２・３ …… 18

第13図　掘立柱建物跡３・柵 …… 20
第14図　木棺墓 …… 21
第15図　土　坑２ …… 22
第16図　土　坑３ …… 23
第17図　土　坑４ …… 24
第18図　掘立柱建物跡１出土土器 …… 26
第19図　掘立柱建物跡２出土土器 …… 26
第20図　掘立柱建物跡３出土土器 …… 26
第21図　その他柱穴出土土器 …… 28
第22図　木棺墓、土坑１・２出土土器 …… 28
第23図　遊離土器（土師器・瓦器・須恵器） …… 30
第24図　遊離土器（須恵器・丹波焼） …… 31
第25図　遊離土器（輸入陶磁器） …… 32
第26図　鉄製品 …… 33
第27図　１トレンチ平面図 …… 43
第28図　有安遺跡出土遺物 …… 44
第29図　Ａトレンチ平面図 …… 45
第30図　Ｈトレンチ平面図 …… 46
第31図　井根口遺跡出土遺物 …… 47

表　目　次

表１　確認調査面積内訳 …… 3
出土土器観察表 …… 35

図　版　目　次

図版Ⅰ　調査区全景
図版Ⅱ　１．調査区遠景
図版Ⅱ　２．調査区終了後全景
図版Ⅲ　１．掘立柱建物跡１

２．掘立柱建物跡２・３、柵

図版Ⅵ　１．掘立柱建物跡１・P10
２．掘立柱建物跡３・P37
３．掘立柱建物跡３・P36
４．掘立柱建物跡３・P44
５．木棺墓検出状況

図版Ⅴ　１．土　坑２検出状況
２．調査区と四斗谷遠景

図版Ⅵ　１．掘立柱建物跡１・掘立柱建物跡２出土土器
２．掘立柱建物跡３、その他柱穴内出土土器

図版Ⅶ　１．その他柱穴内出土土器
２．掘立柱建物跡３出土土器
３．掘立柱建物跡１出土土器
４．遊離土器
５．遊離土器

図版Ⅷ　１．遊離土器
２．遊離土器

図版Ⅸ　１．鉄製品

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

井根口遺跡は、兵庫県多紀郡今田町上小野原字井根口に所在する。井根口遺跡の南、約４㎞の所に位置する立杭地区は、日本六古窯のひとつとして著名な丹波焼(現在は丹波立杭焼と呼称)が生産され、平安時代の終わりから窯業が盛んであった。古代から続く窯業地をもつ今田町は、昭和55年に実施された三本峠北窯・三本峠峯窯の発掘調査を最後に、本格的な発掘調査はなく、考古学的には未解明部分の多い地域であった。しかしここ数年の間、農業基盤整備事業等の開発行為が計画され、埋蔵文化財分布調査・発掘調査が行われるようになってきた。井根口遺跡もこのような開発行為の流れのなかで、遺跡の所在が確認された遺跡である。

井根口遺跡は昭和63年度に、上小野原地区ほ場整備事業に伴い、事前に今田町教育委員会が実施した分布調査、続く平成元年１月に実施された確認調査によって発見された遺跡である。

上小野原地区ほ場整備事業に関連して、井根口遺跡の範囲内を南北に流れる四斗谷川の河川改良工事(県単事業　一級河川四斗谷川河川改良工事　兵庫県柏原土木事務所篠山出張所担当)が計画された。この計画を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所より西口和彦(主査)、別府洋二(技術職員)の２名を兵庫県柏原土木事務所篠山出張所に派遣し、事前確認調査を実施した。確認調査は、平成元年４月より実施した。確認調査の結果、県道下立杭柏原線を西限とし、東はセンター番号36までの範囲(1,224㎡)から、中世の掘立柱建物跡が検出された。この確認調査の成果をもとに、兵庫県教育委員会と兵庫県柏原土木事務所篠山出張所と遺跡の取扱いについて協議がなされた。協議の結果、井根口遺跡は記録保存することが決定され、全面調査を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が主体となり実施することになった。全面調査を実施するにあたり、発掘作業を上山建設株式会社(兵庫県多紀郡丹南町中野45番地)に委託した。

調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所技術職員　村上泰樹・甲斐昭光の両名が担当し、平成元年７月より開始した。

第２節　発掘調査の方法と経過

確認調査の概要

確認調査は、西口・別府の両名が担当し、平成元年４月24より同月28日にかけて実施した。調査地区は、西側を県道下立杭柏原線に、東側を国道372号線に限られた総延長250ｍ、幅20ｍ前後の南北方向に細長い調査区である。確認調査は、トレンチを主体とし、調査区内にトレ

T-1
G-7
T-2
G-6
T-3
G-8
T-4
T-5
調査区
住吉神社
国道372号線
四ヶ谷川
県道下古沢伯原線
弥勒堂
0
200m

第１図　調査区周辺図

トレンチ・坪番号	面積（幅×長さ）㎡
トレンチ1	2.8×15.8=44.24
トレンチ2	2.8×15.0=42.0
トレンチ3	1.4×17.0=23.8
トレンチ4	2.6×14.8=38.48
トレンチ5	2.6×9.9+1.6×1.6=28.3
坪　6	3.0×3.6=10.8
坪　7	2.8×2.6=7.28
坪　8	2.8×2.6=7.28

表1　確認調査面積内訳

ンチを南北方向に5本(T-1～2)設定した。掘削は、耕作土をパワーショベルによる機械掘削とし、耕作土除去後、人力によって掘削した。調査中、遺跡の範囲を確定する必要から、一辺3m前後の坪をさらに3箇所(坪6～8)追加した。遺構が検出された箇所はトレンチ1・トレンチ2である。トレンチ1では溝状の落ち込み・柱穴が検出され、トレンチ2では、柱穴が12個検出された。土層の状況は概ね、20～30cmの耕作土、灰褐色土(遺物包含層)となり、褐色の遺構面となる。落ち込み・柱穴は、この遺構面で確認した。

トレンチ1と2の間に設定した坪7からは、明確な遺構は検出されなかったが、灰褐色土の遺物包含層が認められた。トレンチ1と2の調査結果から判断して、坪7を設定した水田にも、遺構の存在が推定される。

その他のトレンチ・坪は、耕作土やその下層の堆積土中から、須恵器・青磁器等が出土するが、遺構は検出されなかった。とくにトレンチ4では礫層が堆積し、出土した遺物は北方からの流入と考えられた。

出土した遺物は、須恵器の椀・甕が多く、ついで土師器の堝、瓦器椀が目立つ。その他、丹波焼の鉢・椀等の細片が出土したことは注目される。

以上の調査結果から、井根口遺跡の中心部は工事予定内の北側に展開していると考えられ、工事予定地内の井根口遺跡の範囲は、トレンチ1～2間の範囲と判断される。

地形は、北から南に緩く傾斜して下がり、これはトレンチの土層堆積状況からも判断される。過去におけるほ場造成では、調査区の北方を削り、南方域に盛土したと考えられ、調査区内においても、北方域は、遺構の遺存状況は悪いと推察される。

全面調査の方法と経過

調査を開始するにあたり、南北方向に長い調査区を、10m間隔で地区割りし、8区画に分割した。各区割りの名称は区割杭No.0～1の間をⅠ区と呼称し、以下同様にⅧ区まで地区割り名

第２図　全面調査作業風景

称を設定した。遺物の取り上げに際しては、この地区名称を用い、順次遺物を取り上げる方法を採用した。遺跡の空中写真は、写測エンジニアリング株式会社に依頼し、気球による空撮を行うこととした。

さらに、遺跡の地形的環境を把握すること、および下層遺構の有無を確認する必要から、上面の調査終了後、調査区内に深掘りトレンチを設定し、掘削することとした。遺跡周辺の地形環境の復元については、青木哲哉(立命館大学　講師)に御指導をお願いすることになった。

耕作土の除去は、パワーショベルによる機械掘削とし、包含層は原則として人力による掘削とした。 廃土の調査区外への搬出はベルトコンベアーを使用した。

耕作土を除去した段階で、調査区の周壁に沿って、壁際に幅50㎝、深さ50㎝の溝を掘り、事前に遺構検出面の確定を行うとともに、雨天時においては排水溝として活用した(以下側溝と呼称)。調査は遺構の分布密度が高いと想定される調査区の南端Ⅶ・Ⅷ区より開始した。

７月４日から同月11日の間は、発掘調査の準備期間とし、監督員詰所の設置、発掘器材の搬入、地区割り杭の設定、B. M 設定等の諸作業を実施した。

７月12日～18日にかけて、耕作土をパワーショベルによって除去した。翌日19日よりⅧ区からⅠ区の順に、側溝掘削、包含層掘削、遺構検出、遺構調査の諸作業を行った。Ⅶ区を調査した時点で遺構の分布状況から判断して、遺跡が調査区の南側にまで広がる可能性がでてきた。このため７月26日～28日にかけて全面調査と並行して、新たに調査区の南側について確認調査を実施した。確認調査はトレンチ調査とし、工事予定地区の東・西端に南北方向に長いトレンチを平行して２本設定した。便宜上、東側のトレンチをＡトレンチ(2×24m)、西側のトレンチをＢトレンチ(2×17m)と呼称した。確認調査の結果、調査区の南側へ大幅な遺構の広がりは認められなかったが、Ａトレンチ北端で土坑が２基確認された。確認調査の状況から判断して、遺跡の平面的広がりは、土坑の周辺(約４㎡)に限られることが判明した。この部分の取扱いについて協議した結果、今回の全面調査と伴せて調査をすることになった(以下拡張区と呼称)。検出した遺構は、掘立柱建物跡３棟、木棺墓１基、土坑４基と遺構の密度は低い。

8月17日までに、これらの遺構の検出および調査、遺構実測が終了した。気球による空撮のため、8月17日午後より18日午前中にかけて遺跡内および遺跡周辺の清掃を行った。

18日午後、気球による空中撮影を行う。

8月19日午後1時より現地説明会を開催する。太地英章氏(今田町教育委員会　教育次長)をはじめとして参加者60名を数える。

8月21日～23日にかけて、土層図作製、遺構の断ち割り調査、深掘りトレンチ掘削・調査等の諸作業を行った。

8月24日午後1時30分より、現地にて井根口遺跡埋蔵文化財発掘調査工事検査を実施した。

8月25日午前9時40分現地にて、兵庫県柏原土木事務所篠山出張所担当者と現場管理引き継ぎを行う。午後現場撤収完了。

以上の経過を経て、井根口遺跡の発掘調査を終了した。

発掘調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

事務担当	所長	大江　剛
	副所長	才木　繁
	副所長兼調査第2課長	村上　紘揚
調査事務担当	主査	池田　正男
発掘調査担当	技術職員	村上　泰樹
	技術職員	甲斐　昭光
	調査補助員	青木　哲哉
	同	工藤　敏久
	同	西本　寿子
	現場事務員	畠　里美
	室内作業員	松山真理子

第3節　整理作業の経過

出土した遺物量は土器がコンテナー・バットに10箱、金属器が10点と量的に少ない。

整理作業は、平成2年4月から8月にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。作業内容は、土器の水洗、ネーミング、接合・復元、実測等の基本作業を終了した後、

報告書作製作業のためのトレース、遺物写真撮影、レイアウトの諸作業を行った。遺物の写真撮影は、㈱サンスタジオに委託した。

整理作業体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

事務担当	所長	内田　隆義
	副所長	村上　紘揚
	総務課長	小池　英隆
整理事務担当		
	整理普及課長	松下　勝
	技術職員	岸本　一宏
整理担当	主任	村上　泰樹
	技術職員	甲斐　昭光
	嘱託職員	細川美千子
金属器担当	主査	加古千恵子

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

井根口遺跡は、多紀郡今田町上小野原字井根口に所在する。今田町は多紀郡の南西隅に位置する関係から、北側で氷上郡山南町、南東側で三田市、西側で西脇市と境をなしている。旧国でいえば丹波国と摂津・播磨国との国境に位置する。

今田町内、および周辺には標高721ｍの白髪山を最高として、標高600ｍ前後の山々が所在する。その山塊の間を縫うように、今田町の北方に位置する白髪山に源を発する四斗谷川と東条川の２本の河川が南流している。これら両河川は山塊を浸食し、河川沿いに狭溢な平野部を形成している。両河川は今田町の南端に位置する釜屋付近で合流し東条川となり、三田市大川瀬で水路を南西方向に転じ、東条町を経て加古川に繋がる。遺跡は今田町の北部、四斗谷川の上流域に位置する。

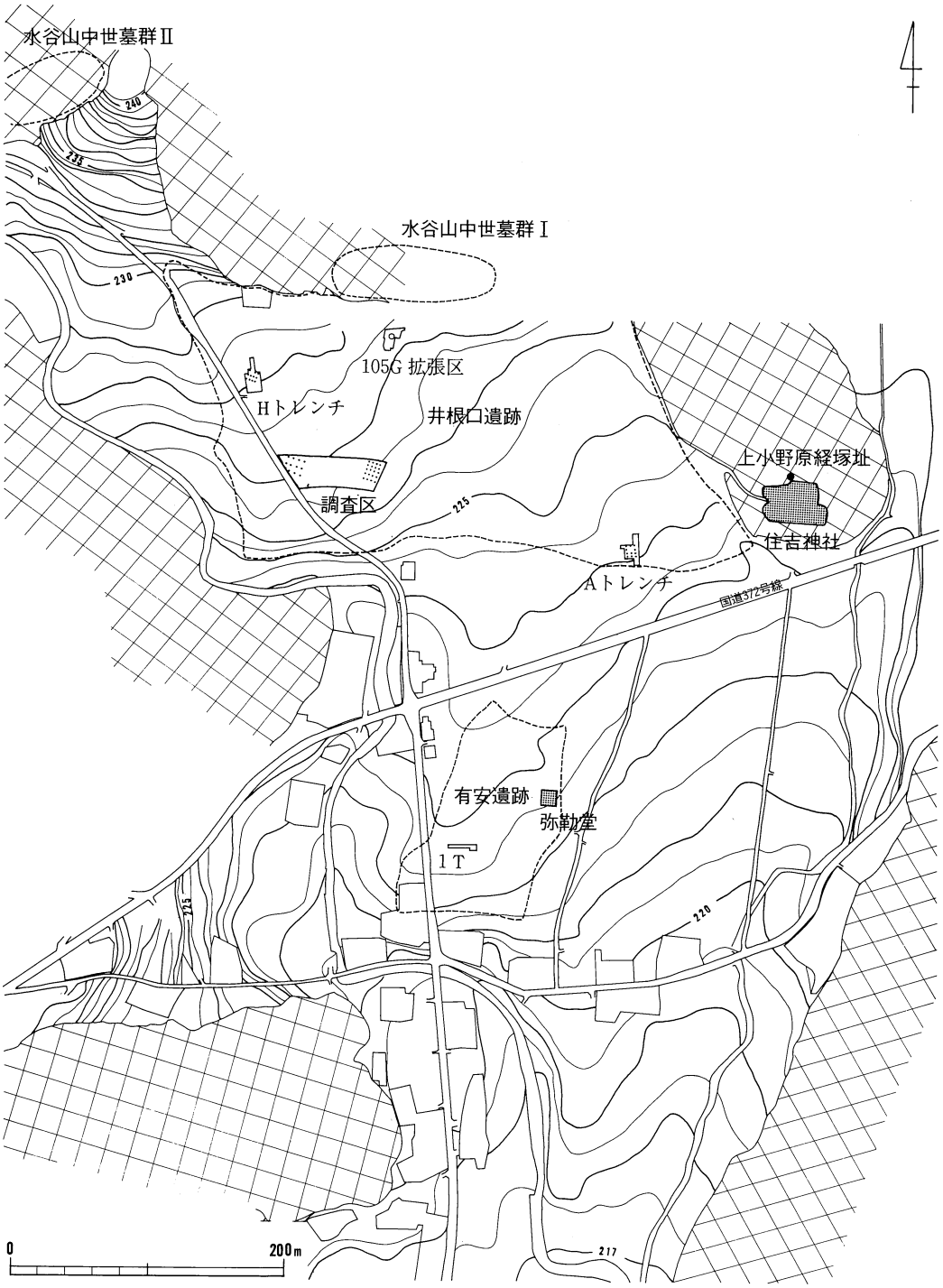
第３図は、上小野原地区の微地形等高線図である。この等高線図を見ると、住吉神社のある標高260ｍの独立丘陵（蛙ノ森）を挟んだ状態で凹状の等高線が認められる。この凹状の等高線は、埋没旧河道と考えられる。このような埋没旧河道のありかたは、住吉神社の独立丘陵が河川の浸食によって形成されたと考えられる。

上小野原地区の地形は、四斗谷を中心とする扇状地形を呈するが、その内容は上記した旧河道、四斗谷川、四斗谷に展開する谷部からの土砂の堆積によって構成され、複雑な地形を呈している。

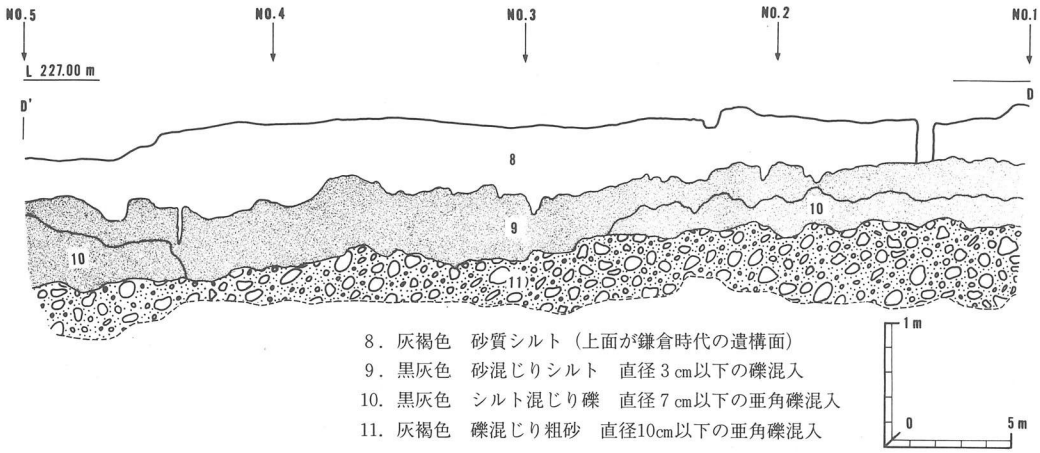
微地形等高線図を詳細にみると、上小野原地区内には４つの微高地が看取される。これらの微高地の一部は、ほ場整備事業に関連して今田町教育委員会が確認調査を実施している。最も高位にあるのが、今回調査した地区がある標高226ｍ付近の微高地である。今田町教育委員会および今回実施した調査で、鎌倉時代の建物跡が検出されている。さらに、南東側に隣接した標高224～225ｍ付近に小規模な微高地が展開している。この微高地上からは、今田町教育委員会の調査で鎌倉時代の建物跡、溝等が検出されている。

国道372号線を挟んで、標高222～224ｍの間に南北方向に長い微高地が展開している。この微高地からは、やはり今田町教育委員会が実施した確認調査で、平安時代末～鎌倉時代初頭の大規模な建物跡が確認されている（有安遺跡）。さらに、この微高地から南側に細長い微高地が延びている。これら微高地群の西側山裾を蛇行しながら、四斗谷川が南流している。

今田町教育委員会の調査と、今回兵庫県教育委員会が実施した調査の成果を総合すると、上小野原地区に所在する遺跡は、これら微高地上の比較的安定した地形に立地している。


水谷山中世墓群Ⅱ
水谷山中世墓群Ⅰ
240
235
230
225
220
217
105G 拡張区
Hトレンチ
井根口遺跡
調査区
上小野原経塚址
住吉神社
Aトレンチ
国道372号線
有安遺跡
弥勒堂
1T
0
200m

第３図　微地形等高線図

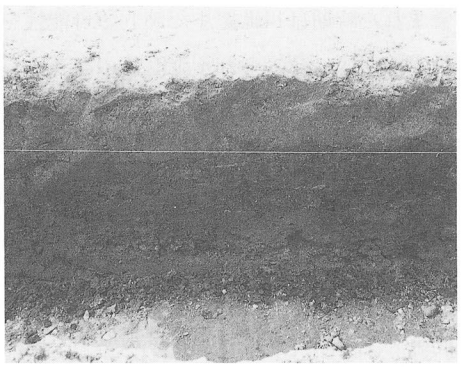


第４図　深掘りトレンチ南壁土層断面図

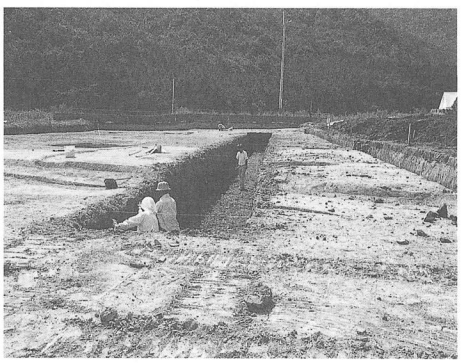
今回調査した地区は、上小野原地区で最高位にある微高地の先端に位置する。この南北に延びる微高地先端部を東西方向に横断する形で調査区内に深掘りトレンチを設定した。第４図はこの深掘りトレンチの土層断面図である。遺構検出面までの層位は次のとおりである。

現認できる最下層は、径10㎝以下の亜角礫を含む砂礫層(11層)である。この砂礫層は西から東へ約５°の角度で傾斜している。その後、黒灰色シルト混じり礫層(９層)、砂混りシルトが40～50㎝の厚さで堆積し、平坦化していく傾向が認められる。さらにその上に、40～80㎝の厚さで砂質シルト層(８層)が堆積し、平坦化は顕著になり、地形的に安定した状態であったことが窺われる。この８層上面が鎌倉時代の遺構検出面である。

これらの堆積土層のうち９層は火山灰が風化して生じたと考えられている、所謂「クロボク」に類似している。ただ土層中に礫、砂が混在している点から、純粋な堆積状態ではなく二次的な堆積と推察される。以上のように、今回の調査で検出した鎌倉時代の建物跡は、微高地が平坦化し地形的に安定した後に築かれている。



第５図　深掘りトレンチ土層断面



第６図　深掘りトレンチ掘削状況

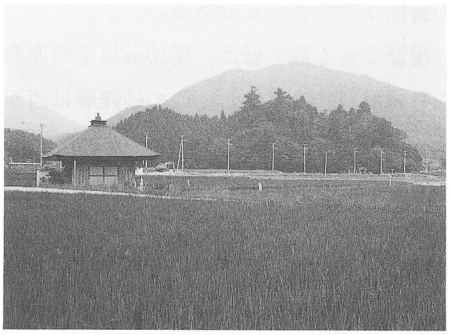
検出された建物跡は、その存続期間が短く、少なくとも14世紀前半には廃絶し、ある時期から水田化していく。この水田について少し触れる。

鎌倉時代の建物跡群が廃棄された後、調査区の東端Ⅶ区に砂質シルト(7層)が堆積する。その後、地形は人為的な改変を受ける。すなわち、Ⅰ～Ⅳ区、Ⅴ区、Ⅵ・Ⅶ区で3段に階段状に削平される。各段差は、現在の水田の区画と一致するところから、この3段の削平部分は水田開発の際生じたものと判断される。したがって、削平地の上に堆積した5層の砂礫層を除く、3・4・6層は、水田土壌と判断される。水田面は現在のものを除くと、2面に別れる。下層の水田は、6層シルト層で構成されて、層厚は10～20㎝を測る。上層の水田は、3・4層の砂質シルトで構成され、上面を現代の水田耕作で削平を受け正確さを欠くが、10～15㎝の厚さをもつ。この2面の水田の間には、砂礫層(5層)が調査区北西側の下層水田を覆うように堆積している。

この両水田層の出土遺物は、おおよそ13～14世紀前半に比定できる。したがって、両水田の営まれた時期は14世紀まで遡れる可能性をもつ。また、当地で水田が開始された頃の地形は、両水田の間に認められる土石流の存在から判断すると、恒常的に水田を営むには適した環境ではなかったと思われる。

第2節　歴史的環境

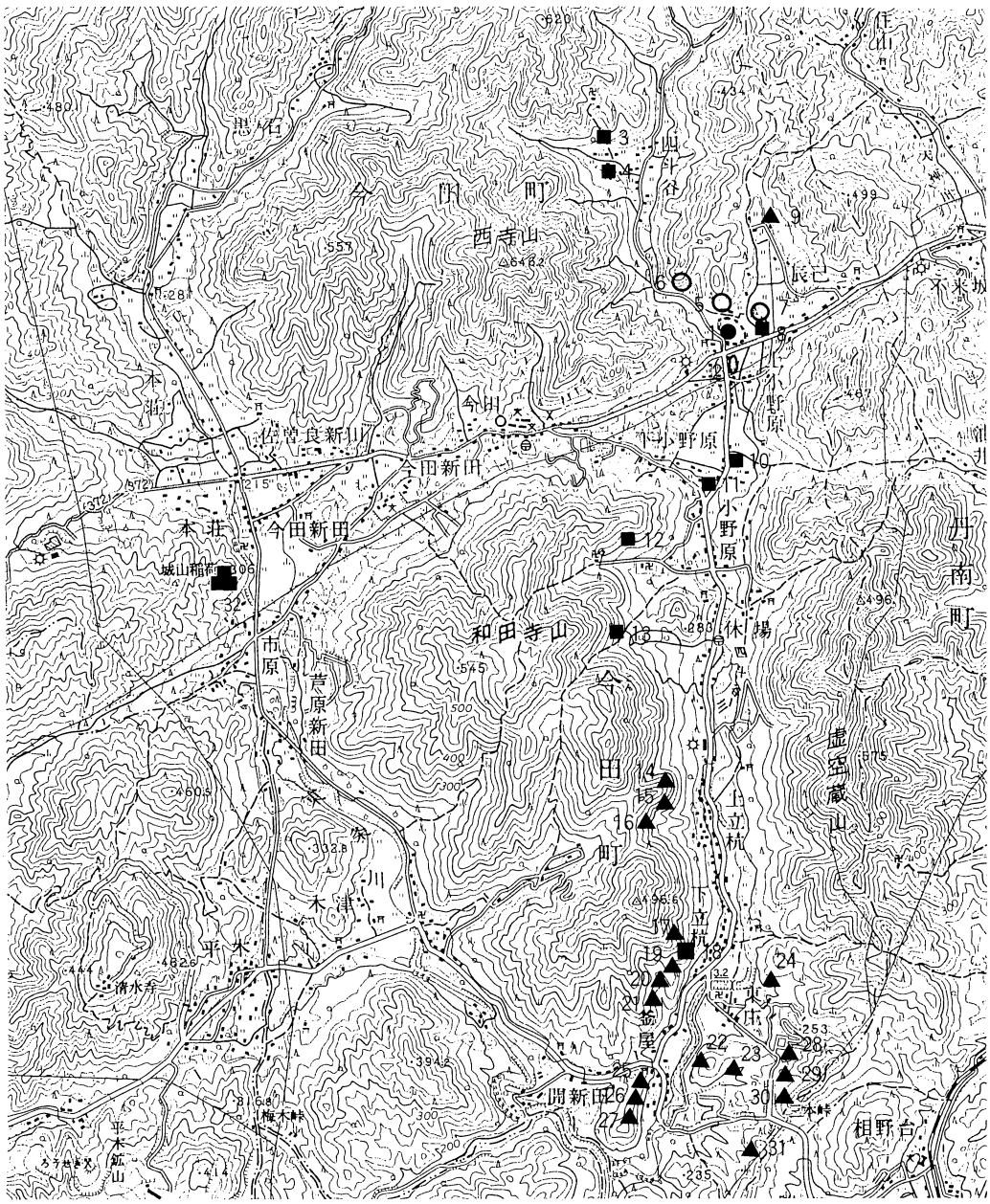
遺跡の所在する小野原が歴史のなかに登場するのは、一ノ谷合戦の前哨戦、三草山の合戦である。壽永三年(1184)正月、平家は福原京を回復し、一ノ谷に城を築き、源氏との戦に備えた。平家追討の宣旨を受けた源義経は、京都をたち丹波路をとおり、播磨・丹波国境の三草山で平家と対峙した。吾妻鏡には「……恵美次郎盛方已下七千騎。着于當國三草山之西。源氏又陣同山之東隔三里行。……」と合戦の様子が描かれている。「平家物語」には義経が平氏と対峙した場所として、小野原の地名が記されている。さらに、合戦に際し小野原の在家を焼き払ったことも記されている。



第7図　弥勤堂と住吉神社

小野原は地理的にみて、京都から丹波国に入る丹波路、この丹波路から分かれて丹波国から播磨国へ抜ける街道沿いに位置していたと考えられ、三草山の合戦もこうした地理的要因で必然的に生じたと理解できる。

井根口遺跡は、古くは住吉神社領小野原荘域に含まれる。小野原荘の成立時期は明らかではないが、少なくとも大同年間(806～810)から天喜三年(1055)の間には荘園として成立したと考



1．井根口遺跡(鎌倉) 2．有安遺跡(平安末～鎌倉初期) 3．善陰寺跡 4．極楽寺跡 5．水谷山中世墓群Ⅰ(中世末) 6．水谷山中世墓群Ⅱ(中世末) 7．蛙ノ森1～3号墳(古墳) 8．「蛙ノ宮」住吉神社(平安？～) 9．小野原窯跡 10. 長林寺跡 11. 浄土寺跡 12. 東光寺跡(古墳～中世) 13. 和田寺跡(中世～) 14. 上立杭北窯(江戸) 15. 上立杭本窯(江戸) 16. 上立杭南窯(江戸) 17. 下立杭北窯(江戸) 18. 中蔵寺跡(不明) 19. 下立杭中窯(江戸) 20. 上立杭南窯(江戸) 21. 南下立杭窯(江戸) 22. 源兵衛窯跡(鎌倉) 23. 太郎三郎窯(鎌倉) 24. 庄谷窯(鎌倉) 25. 釜屋北窯(安土桃山) 26. 釜屋中窯(安土桃山) 27. 釜屋南窯(安土桃山) 28. 金床窯 29. 三本峠北窯(鎌倉) 30. 三本峠南窯(鎌倉) 31. 稲荷山窯(室町) 32. 市原城跡(安土桃山)

第8図　周辺の遺跡

えられている。この小野原荘の歴史的背景については、久下隆史氏の業績[①]があり、以下この業績を踏まえ小野原荘について簡単に触れる。

小野原荘の荘域は、「篠山封疆志」によると、小野原、四斗谷、今田、立杭、市原、木津、本荘、黒石の地名があり、現在の今田町全域であったと推定されている[②]。なかでも、小野原、立杭、木津、市原、今田、黒石の各村には住吉神社が祭られ、住吉社領の名残を残している。これらの住吉神社のなかでも、井根口遺跡の南東、上小野原蛙ノ森にある通称「蛙ノ宮」とよばれる住吉神社は、摂津住吉神社より分神し、創建された神社である。今田町内にある6社の住吉神社の中心的存在で小野原荘の総社と言われている。「蛙ノ宮」住吉神社では、下司、公門、田所の三職が今も祭りを執行し、「蛙踊り」と呼ばれる田楽を奉納している。この「蛙ノ宮」住吉神社の祭神は表筒男命・中筒男命・底筒男命など住吉神社本来の祭神のほかに、神功皇后・應神天皇・天兒屋根命・倉稲魂命が祭られている[③]。平安時代には小野原荘は領家住吉神社によって、強力な荘園支配が行われたと推察される。天喜三年(1055)「丹波国後河田堵等解」の解文副進状には「多紀郡西県住吉領小野原御庄此等御領所免除已了」[④]とあり、国衙より賦課を免除されている。小野原荘が住吉神社の力を背景に、強力な領知権を保持していたことが窺われる。

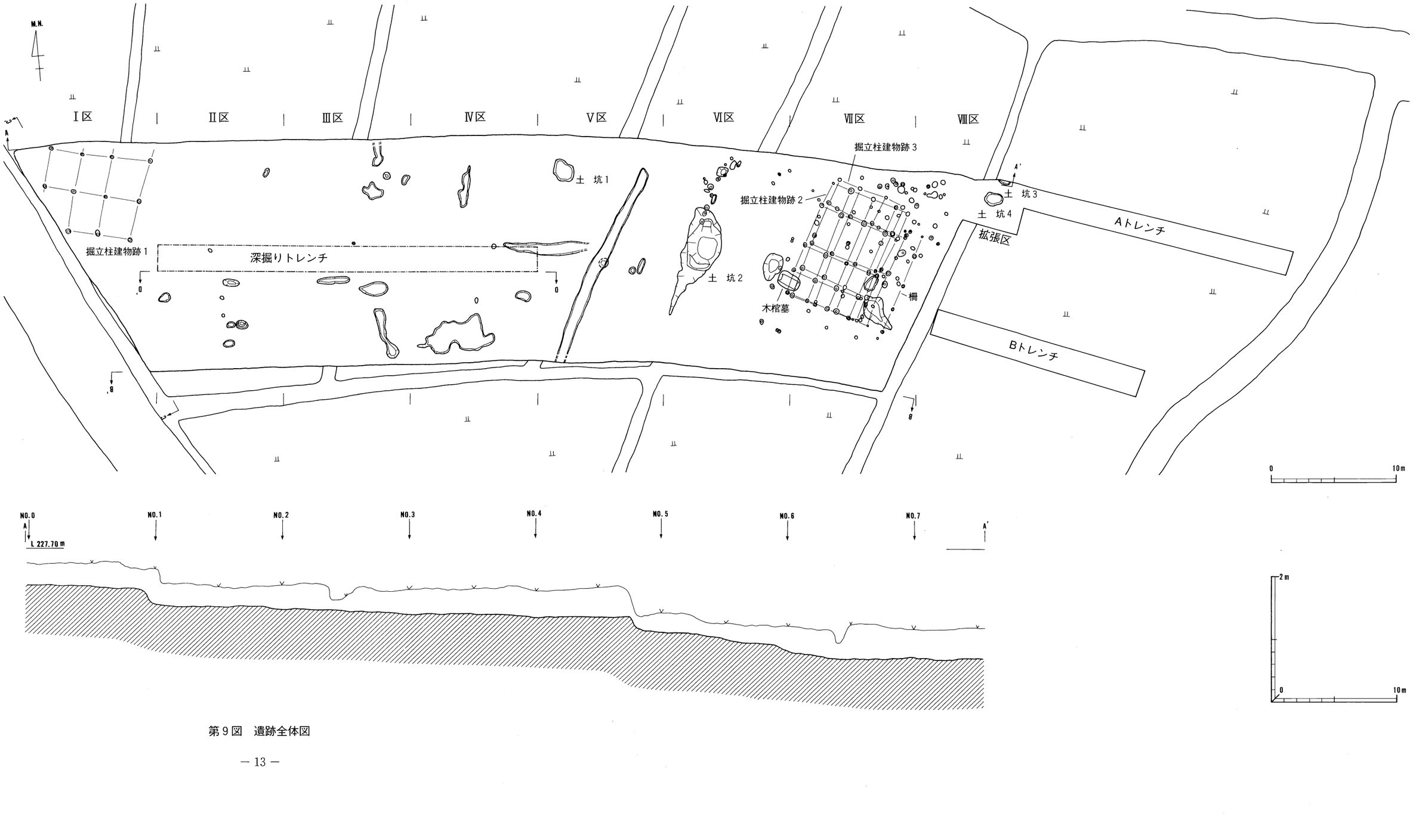
鎌倉時代になると、住吉神社の強固な荘園支配体制が徐々に崩れていく。11世紀以降、勢力を増してきた清水寺と荘園支配を巡って境相論を展開する。この境相論は天治二年(1125)に始まり、承久三年(1221)まで、3 回にわたって行われた。しかしいずれも住吉神社側に有利にはたらかず、観応二年(1351)には、清水寺が地頭職を得て、市原の所出を住吉神社側と折半している。この結果、市原・本荘・木津・黒石など西谷地区の各村が清水寺の支配に組み込まれていったようである。寿永三年に焼失したと言われている東光寺(和田寺の前身)は文治元年(1185)清水寺二藐円法師によって再興され、さらに康応元年(1389)には和田谷に寺を移し、和田寺と改名する[⑤]など、清水寺の勢力は西谷地区だけではなく東谷地区まで及んでいったと推察される。

このように住吉神社の荘園支配体制は弱まり、康正二年(1456)には小野原荘は和田寺に寄進され、住吉神社の荘園支配は完全に終わる。

井根口遺跡は、清水寺と住吉神社が境相論を展開し、住吉神社の荘園支配体制に翳りがではじめた13世紀前半から14世紀の時間幅で、成立した遺跡である。

註)

① 久下隆史 「小野原荘の神社と祭祀」『村落祭祀と芸能』御影史学研究会編 1989
② 細見末雄 『丹波の荘園』1980
③ 『兵庫縣神社誌』上巻 兵庫県縣神職會編 1937
④ 『平安遺文』三 756
⑤ 奥谷高史『丹波古銘誌』1975


M.N.
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅳ区
Ⅴ区
Ⅵ区
Ⅶ区
Ⅷ区
掘立柱建物跡 1
深掘りトレンチ
土 坑 1
土 坑 2
掘立柱建物跡 2
掘立柱建物跡 3
木棺墓
柵
土 坑 3
土 坑 4
拡張区
Aトレンチ
Bトレンチ
0
10m
NO.0
NO.1
NO.2
NO.3
NO.4
NO.5
NO.6
NO.7
L 227.70 m
2m
0
10m

第 9 図　遺跡全体図

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

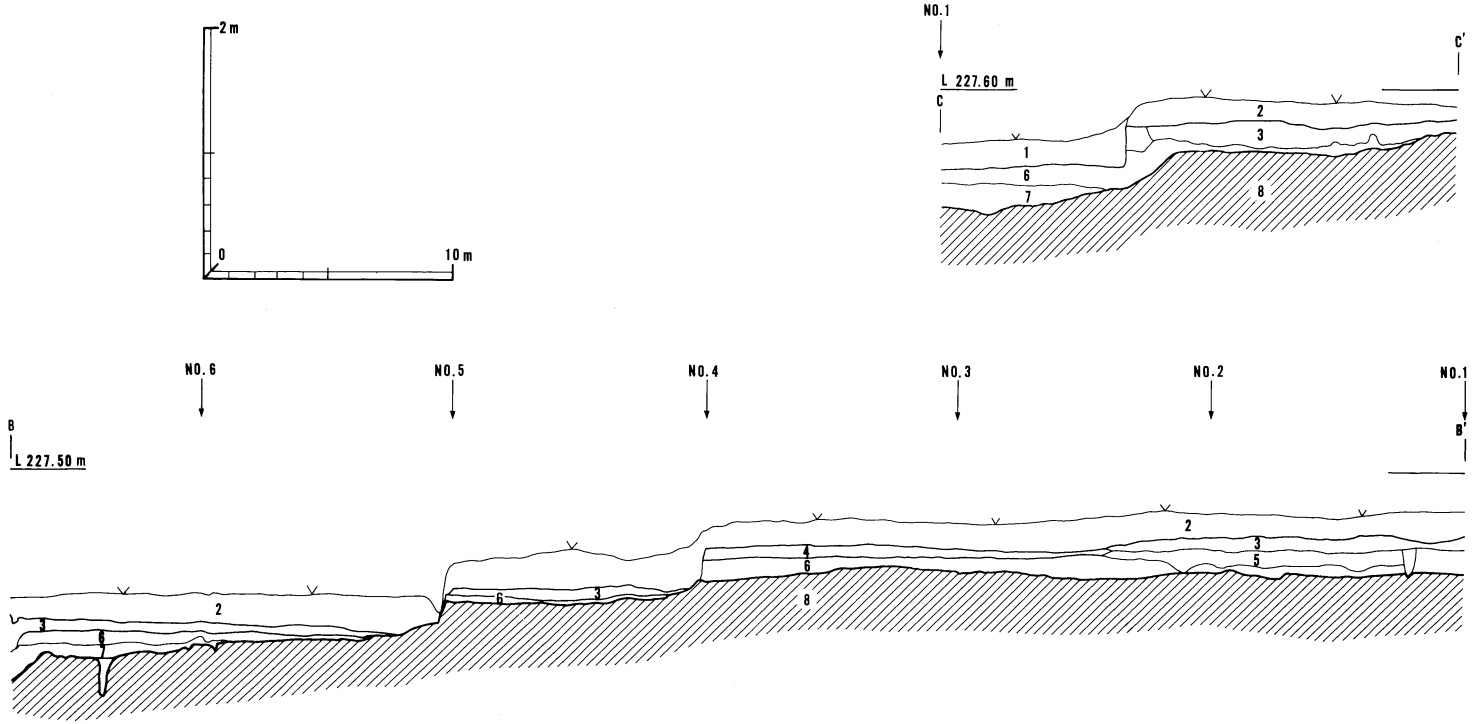
調査の結果、検出された遺構は掘立柱建物跡３棟、柵、木棺墓１基、土坑４基である。調査区が狭小なこともあり遺構密度は希薄である。柱穴は調査区の西・東端で約146個検出された。うち調査区の西端にある11個の柱穴は規則性をもって並んでおり、容易に掘立柱建物として識別された。しかし調査区の東端、Ⅵ～Ⅷ区に密集する残り135個の柱穴については２棟の建物跡（掘立柱建物跡２・３）を確認したのみであった。おそらく後世の水田開発による削平によって消失した柱穴があり、建物跡の識別を困難にしていると思われる。柱穴の密集域には２棟の建物以外にさらに数棟の建物があったと推察される。確認された３棟の掘立柱建物跡は、いずれも総柱建物で棟行きを同一にしている。Ⅰ区で検出した掘立柱建物跡１は北側調査区外に桁行きが延び、また西側調査区外にも梁行きが延びる可能性をもつ。このため建物の規模は明確にはできなかったが、柱間・柱穴の規模から判断して、Ⅶ区で検出された掘立柱建物跡２・３と同じ３×４間程度の規模と推察される。掘立柱建物跡２・３は東側に庇をもつ３×４間の建物跡で、棟軸方向を同一にして重なるように検出された。これらの建物跡の東側には、建物跡の桁行きに平行するように柵が設けられている。掘立柱建物跡１と掘立柱建物跡２・３は直線距離で約50ｍ離れ、両建物跡の間には土坑１・２を除き、遺構が存在しない空白地帯となっている。

掘立柱建物跡２・３の南西隅には木棺墓が１基検出された。木棺墓の主軸は東西方向を向き、掘立柱建物跡２・３の棟軸方位に直交している。墓壙内には両側板より内側に小口板をもつ全長1.5ｍの小さな棺が埋置され、副装品はなかった。

土坑は４基検出された。土坑はいずれも調査区の東半に集中している。土坑１はⅤ区北側、土坑２はⅥ区中央に位置し、土坑３・４は掘立柱建物跡２・３の北東側、拡張区にそれぞれ位置している。土坑は長軸１ｍ前後の楕円形を呈するものが多く、また遺物も埋土中より出土し、確実に土坑に伴う遺物はない。土坑２は、規模も長軸３ｍ前後と大きく、他の土坑と規模・形態も異なる。また埋土の状況が人為的に埋め戻された状況を呈しており、他の土坑と性格が異なると推察される。

調査区中央の東寄り、Ⅴ区を南北に横断する溝は、現在の水田を画する溝である。また掘立柱建物跡１と掘立柱建物跡２・３の間に点在する不定形の落ち込みは、遺物の出土が若干認められるものの、遺構の深度が５㎝と浅く、人為的に掘削された形跡は見当たらない。したがってこれらの溝、落ち込みは今回の報告から除外した。

以下個々の遺構について概要を述べる。



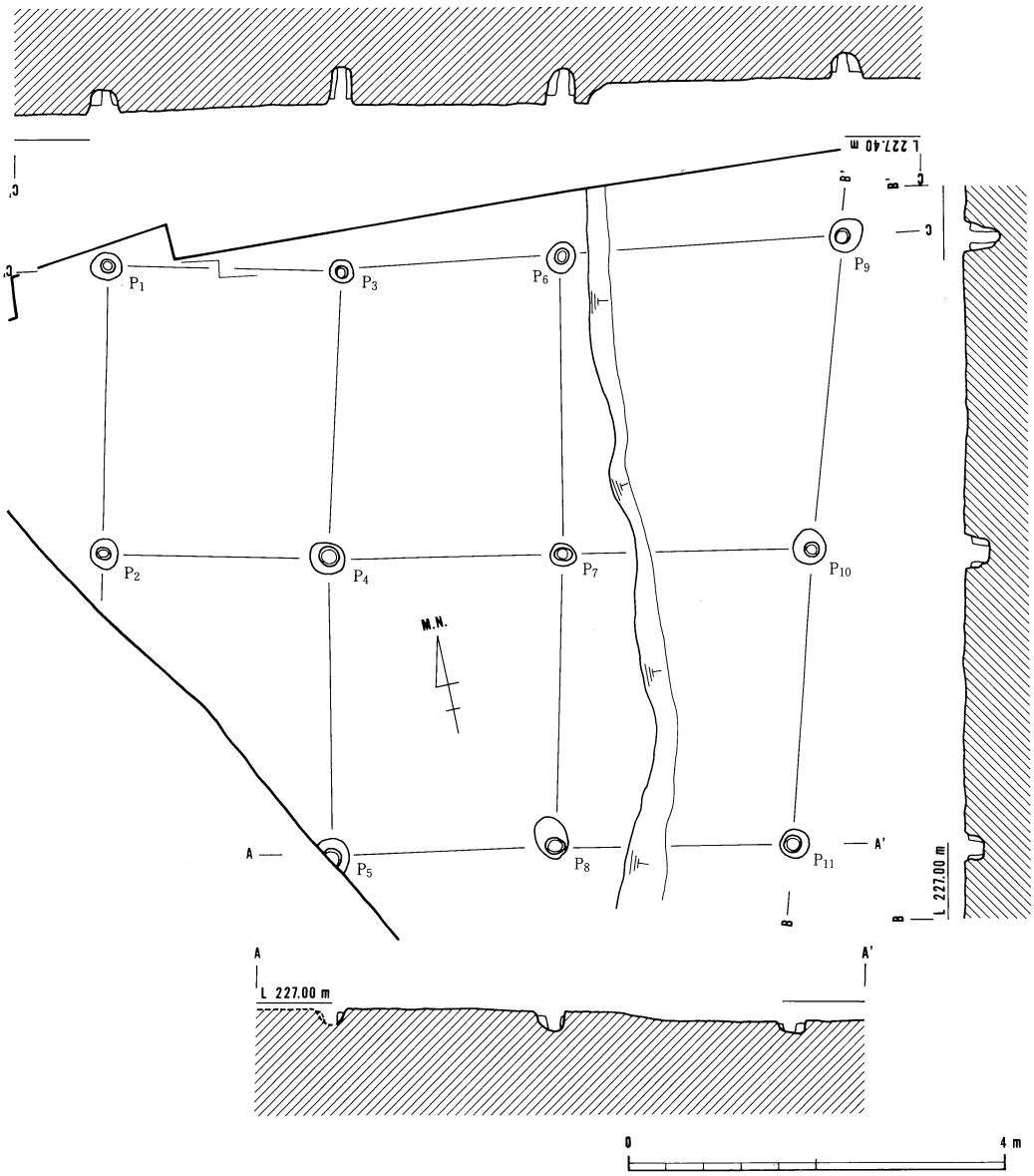
第10図　調査区土層断面図

1．攪　乱
2．耕　土
3．灰　色　砂質シルト
4．灰　色　砂質シルト
5．褐灰色　砂質シルト
6．赤褐色　シルト（水田土壌か？）
7．褐灰色　砂質シルト
8．暗褐色　シルト混じり礫（直径10cm以下の亜角礫）

第２節　遺　　構

掘立柱建物跡１

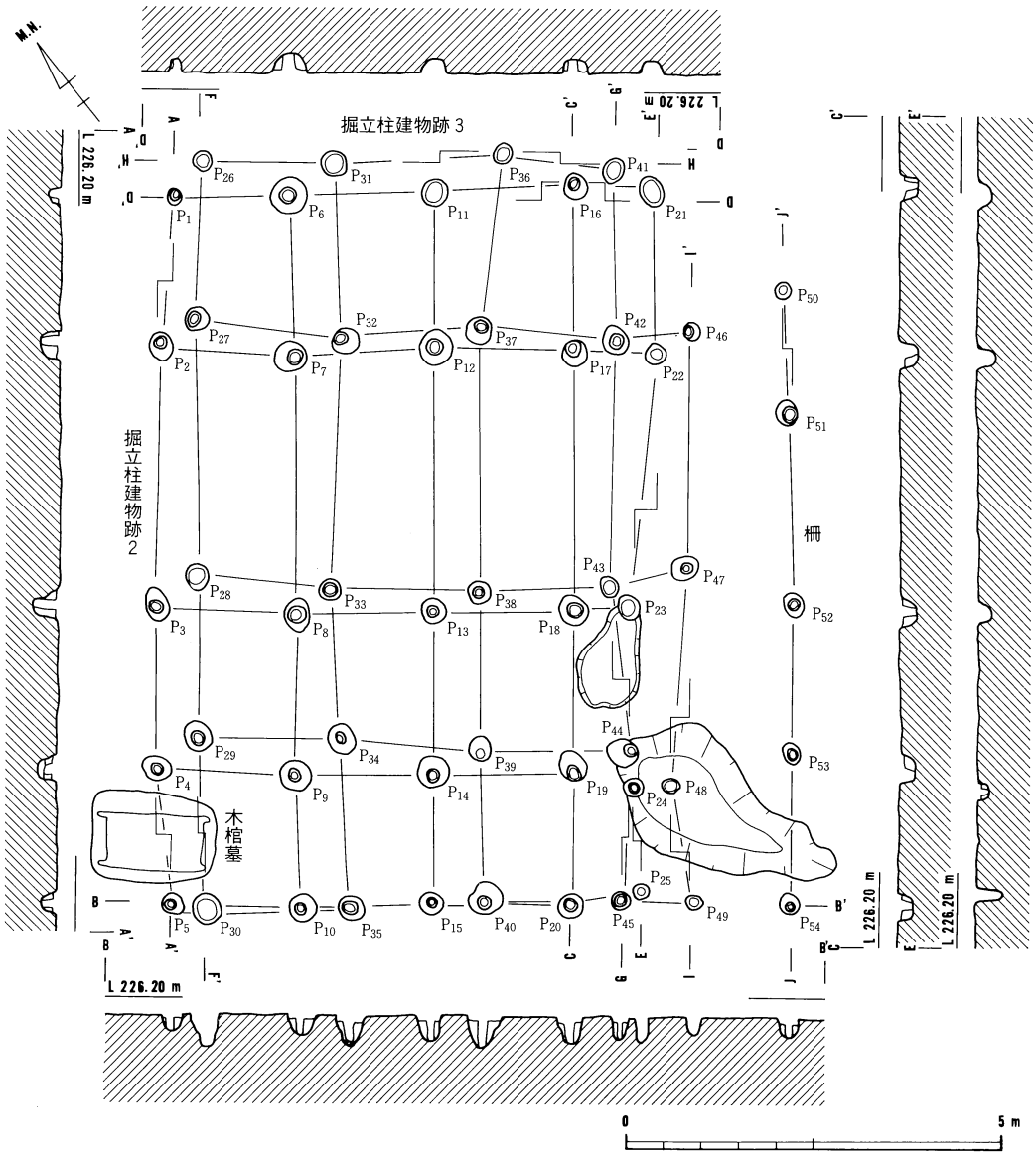
調査区西端の３層上面で検出された、桁行２間以上、梁行３間以上の総柱建物である。柱穴は11個確認された。建物の西および北端が調査区外にある可能性をもつため、規模、庇の有無



第11図　掘立柱建物跡１

は明らかでない。

棟軸の方向はＮ13°Ｅであり、現在みられる水田の畦畔方向に一致している。身舎の桁行長は6.3ｍ以上、梁行長は7.7ｍ以上である。柱穴の掘形は直径30～45㎝、深さ30～40㎝であり、確認できた柱痕は直径20㎝を測る。各柱穴間の距離は、桁行が302～330㎝で、その平均は315㎝（約10尺）である。また、梁行の柱間寸法は240～290㎝であり、その平均は251㎝（約８尺）を測る。



第12図　掘立柱建物跡２・３

遺物の出土量は少なく、P10の柱穴掘形内より破片を含めると須恵器椀(5)をはじめ、5点出土している。他に鉢(6)がP2より出土している。

掘立柱建物跡2

調査区東端の3層上面で検出された桁行4間、梁行3間の総柱建物である。平面長方形を呈する身舎の東側には4間の庇をもつ。南西隅に木棺墓が位置している。

棟軸の方向はN26°Eである。身舎の桁行長は9.3m、梁行長は5.5mであり、身舎の面積は約51.6㎡を測る。柱穴の掘形は直径が25～40cm、深さ25～40cmであり、柱痕の確認できるものはなく、柱の抜き取り痕が確認できるものがあったことから、掘立柱建物跡3への建て替えを行ったことが判る。

各柱穴間の距離は、梁行が170～190cm(約6尺)とほぼ均一であるのに対して、桁行のそれは等間隔ではない。南から数えて3～4列間においては、柱間が約340cm(約11尺)となっており、これ以外の計測値の平均、205cm(約7尺)よりも広くなっている。

庇の長さは9.3mであり、柱穴の位置は身舎の柱筋の延長線にほぼのっている。

遺物は、土師器皿(7)・堝(8)、須恵器椀(10)、丹波焼鉢(9・11・12)が出土し、P2柱穴内より出土した(8)は、掘立柱建物跡3のP27より出土した堝と接合された。

掘立柱建物跡3

掘立柱建物跡2から東北方向に約50cmの位置にある。掘立柱建物跡2と同じく桁行4間、梁行3間の総柱建物である。長方形の身舎の東には3間の庇をもつ。

棟軸の方向はN26°Eである。梁行長は5.5mと、建て替え前の掘立柱建物跡2と同規模である。桁行長については、最も南の柱筋が建て替え前の位置から北へ移動していないため、約9.7mと長くなっている。これに伴って身舎の面積も54.4㎡に拡張されている。柱穴の掘形は直径が25～40cm、深さ25～40cm、柱痕の直径は10cm前後と掘立柱建物跡1よりも小規模である。P32・34・37・38では柱根が部分的に遺存していた。

各柱穴間の距離は、梁行の平均が184cm(約6尺)でほぼ等間隔である。桁行は掘立柱建物跡2と同様、南から数えて3～4列間においては柱間が338cm(約11尺)を測り、これ以外の平均値210cm(約7尺)よりも広くなっている。ただ、掘立柱建物跡3にあっては、建て替え時に南北方向への拡張が行われているため、前述したように南から1～2列目の柱間は195～230cmと若干広くなっている。

庇の長さは7.6mである。柱間寸法は165～290cmと均一でない。柱穴の位置は身舎の柱筋の延長線上にほぼのっている。

遺物は柱穴から出土している。P36からは掘形内より土師器堝(36)・須恵器小皿(16)が、P37からは丹波焼甕(18)等が出土している。P29からは、土師器堝(14)が、P30から須恵器鉢(17)がそれぞれ掘形内より出土している。

柵

調査区東端の３層上面で検出された。掘立柱建物跡２・３の東側に、棟軸方向に平行する形で存在する。建物との共伴関係については明らかではないが、三者が平行すること、一部で掘立柱建物跡３の柱筋の延長上に柱穴が位置することから、これらが同時に存在していた時期があったと考えるのが妥当である。掘立柱建物跡２の庇からは2.0ｍ、掘立柱建物跡３の庇からは1.5ｍ離れている。

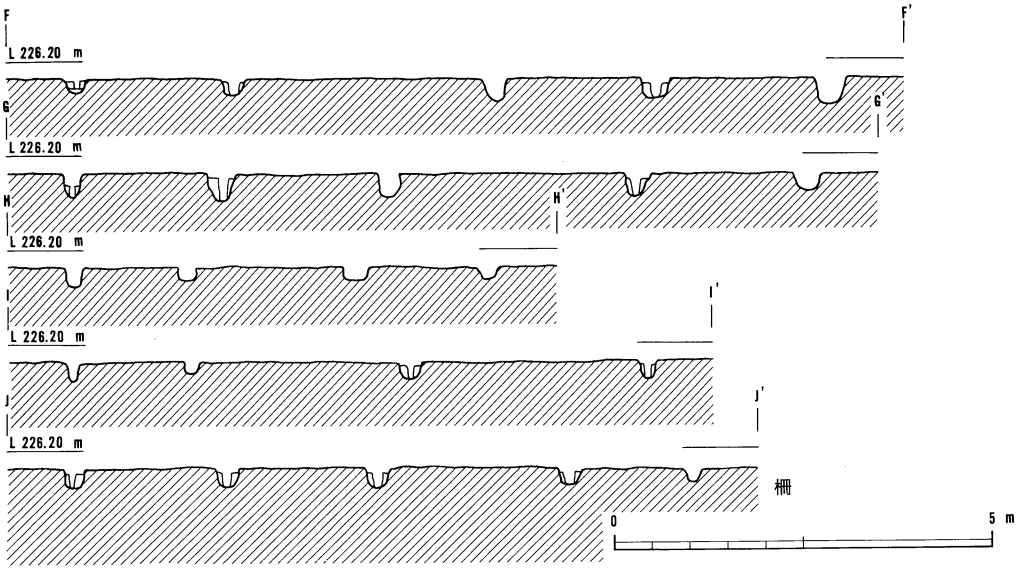
規模は４間分で、約8.2ｍを測る。柱穴の掘形は直径20～30㎝、深さ20～25㎝であり、確認しえた柱痕は直径約10㎝を測る。各柱間の距離は150～250㎝、平均は約200㎝である。

遺物は出土していない。

木棺墓

調査区の東方、掘立柱建物跡２・３の南西隅で検出された。検出面は３層上面である。長軸方向はＮ52°Ｗを指し、掘立柱建物跡２・３の梁方向とほぼ平行している。さらに木棺墓の位置は、掘立柱建物跡２のＰ４とＰ５の柱間の中央にあたっており、その東半部分を建物に重ねる形で存在する。

墓壙の平面形は長軸1.68ｍ、短軸1.16ｍの隅丸長方形を呈する。また、墓壙壁と壙底との区別が判然とせず、なだらかな断面形をもつ。検出面から墓壙底までの深さは中央部で約21㎝を

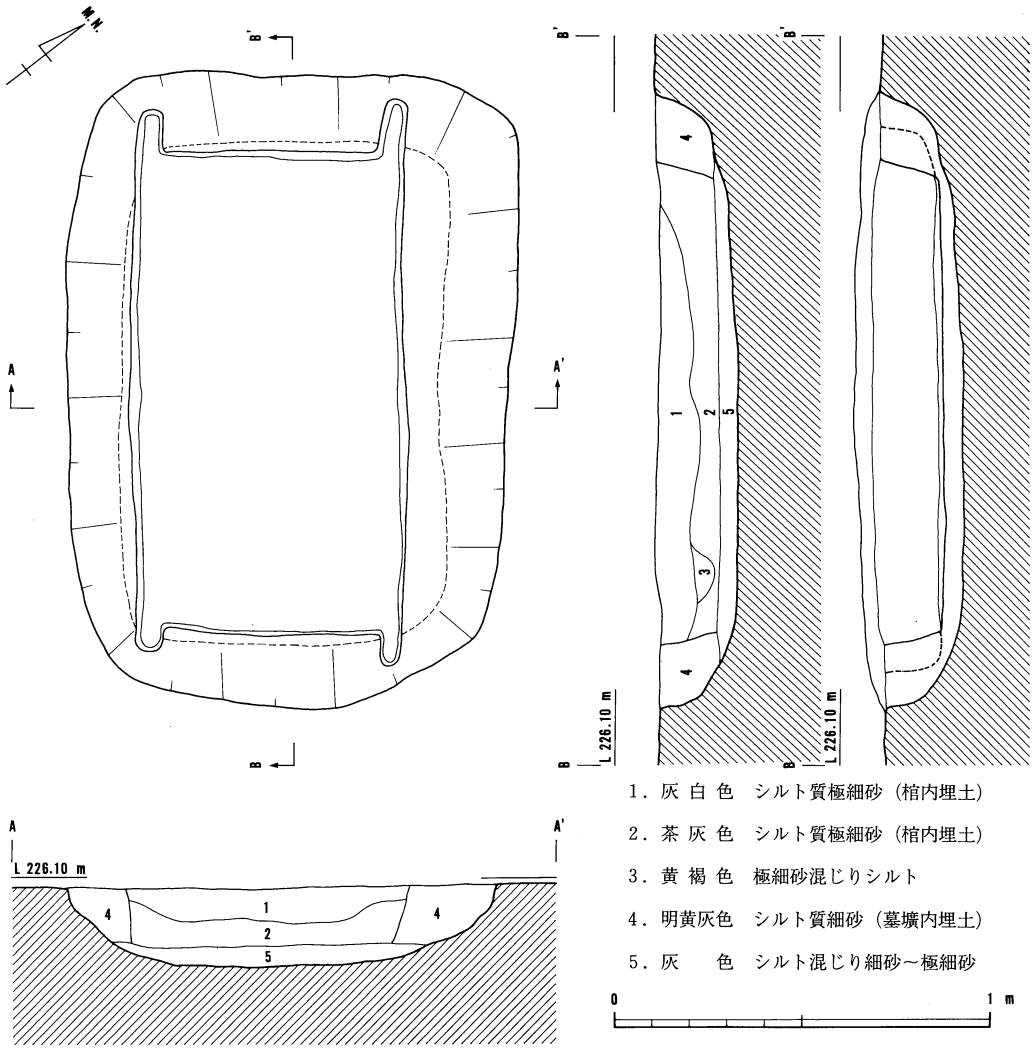


第13図　掘立柱建物跡３・柵

測る。

木棺は、このなだらかな壙底に厚さ約５㎝の置き土をした上に埋置されている。木棺の規模は、棺外の墓壙内埋土の観察から復元できる。長軸の長さ、すなわち木棺外法は1.28ｍ、短軸のそれは西端小口部で71㎝、棺中央部で70㎝、東端小口部で71㎝を測る。木棺の形態は、両側板が小口板を挟むもので、南北２枚の側板の長さはそれぞれ143㎝、150㎝を測り、厚さは約５㎝である。小口穴はもたず、底板や蓋板の有無は土層観察によっても確認できなかった。

木棺内埋土、墓壙内埋土からは土器の小片の出土をみたが、副葬品と識別できる遺物は皆無であった。図化できた土器は２点で、いずれも墓壙内よりの出土である。土器は須恵器椀(27)、



第14図　木棺墓

鉢（28）が出土している。

この木棺墓は先に述べた掘立柱建物跡２・３の南隅に主軸を東西方向に向け埋置されており、建物と密接な関係を有する可能性が考えられるが、出土した土器は、建物跡出土の土器より時期的に新しい。

土　　坑１

調査区の中央やや西よりで検出された楕円形の土坑である。３層上面で確認された。

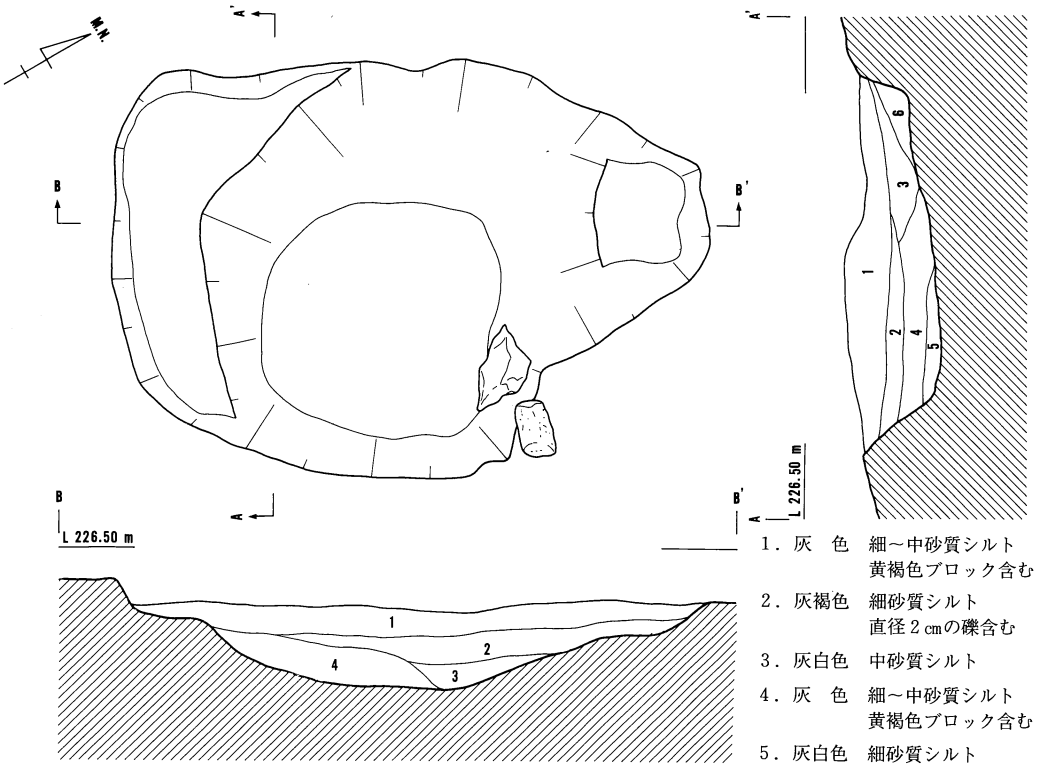
平面形は楕円形であり、その規模は長軸の長さ2.0ｍ、短軸の長さ1.6ｍを測る。断面形は台形であり、坑底は平坦である。検出面から坑底までの深さは約15㎝である。

遺物は須恵器鉢(29)が出土している。

土　　坑２

調査区東よりの３層上面で検出された遺構である。現在みられる水田畦畔の直下に位置するため、削平を受けているものと思われる。

平面形は不整形な楕円形であり、長軸の長さは約7.9ｍ、短軸の長さ約5.5ｍを測る。長軸の



1．灰　色　細～中砂質シルト
　　黄褐色ブロック含む
2．灰褐色　細砂質シルト
　　直径２㎝の礫含む
3．灰白色　中砂質シルト
4．灰　色　細～中砂質シルト
　　黄褐色ブロック含む
5．灰白色　細砂質シルト
6．黄灰色　極細砂質シルト

第15図　土　　坑２

方向はN18°Eを指す。

短軸の断面は台形を呈し、坑壁も比較的大きい角度で落ちていくのに対し、長軸の断面は南北両肩に段をもち、なだらかに坑底にいたるものである。検出面から坑底までの深さは約48cmである。

埋土は全て人為的な埋め土であり、他の遺構と異なった様相を示す。遺物は細片のみで、最上層に比較的多い。鎌倉時代の須恵器椀破片、白磁椀(30)等が出土している。最上層は地山(3層)のブロックを多く含むため、埋め戻しの際に地山を含む土を投入した可能性がある。また、埋土の上、中層より河原石が出土している。

土　坑3

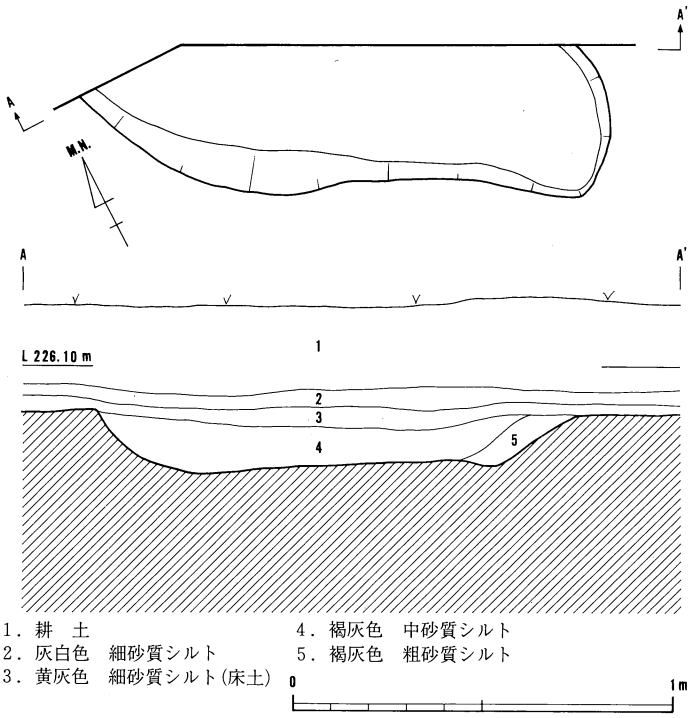
全面調査区の東北に設定したAトレンチ(第2次確認トレンチ)で確認された遺構である。

掘立柱建物跡2・3の東北方向に近接している。

土坑の北半は調査区外にのびているため、この遺構の正確な形状および規模については不明である。

3層上面で検出された。調査区北壁の観察によれば、断面形は台形であり、深さは最深部で約15cmを測る。坑底は平坦である。

埋土から出土した遺物は少なく、すべて細片で、須恵器、土師器片が出土している。



第16図　土　坑3

土　坑4

土坑3と同じく、調査区の東北に設定したAトレンチで確認された遺構である。このため調査区を拡張して平面的な調査を実施した。

遺存状況はきわめて悪く、土坑上面は削平を受けている。

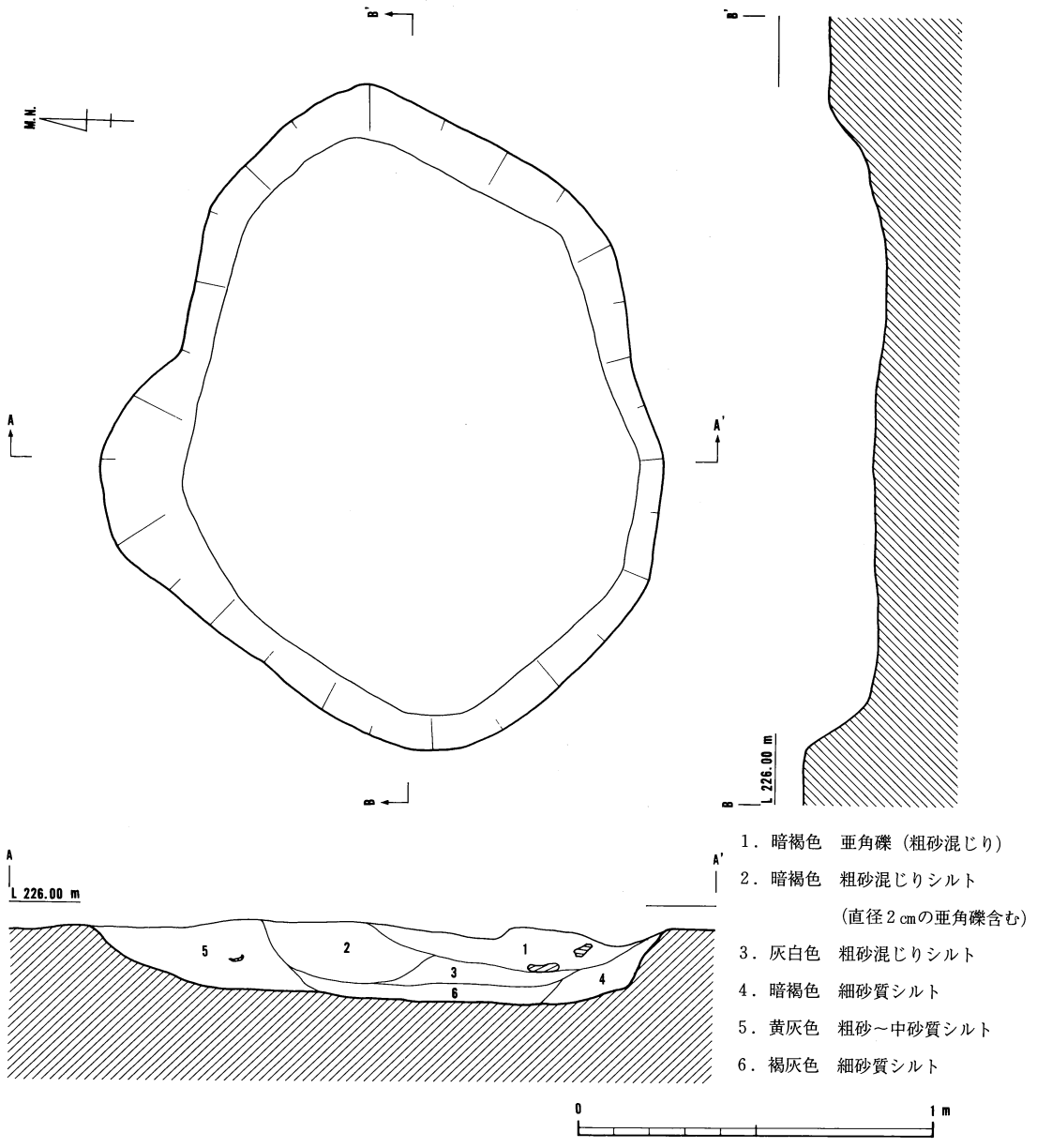
3層上面で検出され、平面形は楕円形を呈する。

検出面における規模は、長軸の長さ 187cm、短軸の長さ158cmである。断面形は長・短軸と

も台形であり、深さは最深部で17㎝である。

坑底は平坦であり、その規模は長軸の長さが162㎝、短軸の長さが128㎝を測る。

出土遺物は少なく、土師器の細片が出土している。



第17図　土　　坑４

第3節　遺　　物

井根口遺跡より出土した遺物は、土師器、須恵器、丹波焼、輸入陶磁器の土器をはじめ、わずかではあるが鉄製品が5点出土している。出土した土器は総数2,170点と少量である。これは調査区が狭小で遺構密度が希薄であったことに起因している。

土器は、多くが細片で、図化可能な土器は75点と非常に少ない。以下各遺物について概要を述べる。

土師器(7・8・13・14・19・20・31～39)

土師器は皿・堝・羽釜が出土している。

皿は7・31～33である。7は平底で器高が高く杯に近い皿である。口径が12㎝を測る中皿である。31～33は小皿と考えられる。口縁部が外反する31と、直線的に外傾する32・33がある。33は小皿のなかでもさらに小型の皿で、底部は回転糸切り手法によって切り離されている。

堝は完存するものがなく、多くが口縁部の破片である。口縁部の形態で4つに大別される。

8・13・34は口縁部が「く」の字状に外反する堝である。8・34は口縁端部を四角におさめ、34は端部に沈線が巡っている。13は端部を四角におさめた堝に比べて、口縁部が直線的に立ち上がる特徴をもつ。

14・20・35は、口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部が外方へ突出する堝である。口縁部外面は上下2段の強いヨコナデ調整が施され、口縁部中位が膨らむ傾向が認められる。外面体部はタタキが施され、内面はナデ調整で器面を整える。

19・36・37は、調整技法が14・20・35の一群と同じであるが、口縁端部が玉縁化する一群である。36は内面に同心円文の当て木痕跡を残す。また37はこの一群のなかでも体部の張りが弱く、あるいは細分する必要があるのかもしれない。

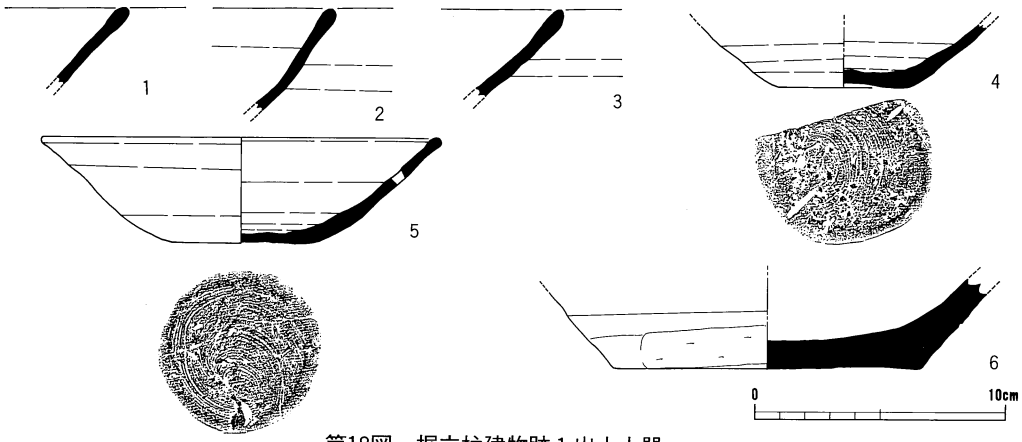
39は口縁部が肥厚しながら短く立ち上がり、端部がわずかに外方に突出する堝である。本遺跡では1点のみ出土している。

25・38は羽釜である。25は断面三角形の鍔をもち、口縁端部が外方に突出する堝である。体部外面は平行タタキを施し、内面には同心円文の当て木痕跡を残している。38は鍔が短い堝である。

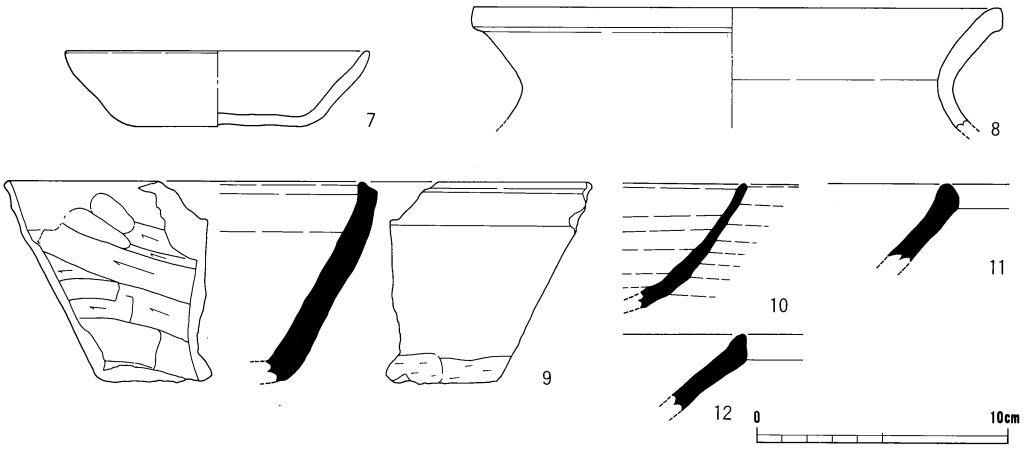
瓦　　器(21・40・41)

21・40・41は瓦器椀である。21・41は断面三角形の高台を貼り付けている。41は内面に比較的密な螺旋状の暗文を施し、見込み部には鋸歯状の暗文を施している。いずれも外面の暗文の有無は不明である。40は断面台形の高台を張り付けた椀である。内面に螺旋状の暗文の痕跡を残している。

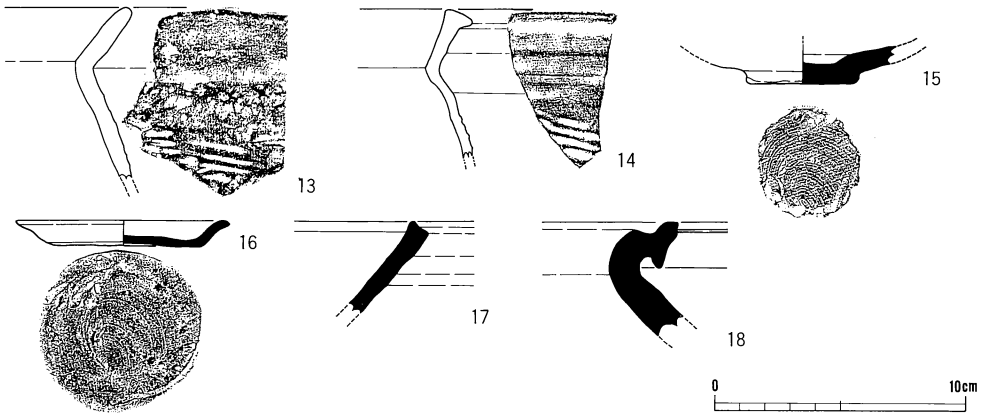
須恵器(1～6・10・15～17・22～24・27～29・42～54)



第18図　掘立柱建物跡１出土土器



第19図　掘立柱建物跡２出土土器



第20図　掘立柱建物跡３出土土器

須恵器は椀・皿・鉢・甕がある。

器種は椀が多く、5を除き口縁部、底部の細片が多い。椀は底部の特徴から3つに大別される。15・27・43の一群は突出した円盤状高台をもつ椀である。43は、底部をヘラ切り手法によって切り離し、その後高台側面をナデ調整している。これに対し15・27は回転糸切り手法をもちいて、底部を切り離しており、両者には技法的な違いがある。また15・27は見込み部に凹みをもつ器形的特徴をもっている。

わずかに突出した円盤状高台をもつ47は、本遺跡から1点出土した。回転糸切り手法をもちいて底部を切り離している。

4・5・48・49は平底の椀の一群である。底部は回転糸切り手法がもちいられ、15・27のように見込み部の凹みは認められない。以上のように椀は底部の円盤状高台が退化していく過程が認められる。椀の口縁部は10を除きすべて端部が肥厚しており、おそらく平底椀の一群の口縁部と考えられる。10は粘土紐巻き上げ成形で全体に薄くつくられ、端部は肥厚しない。口縁部内外面には酸化鉄が塗布され、赤く発色している。後述する丹波焼の椀を模倣した可能性がある。

皿は3点(16・22・23)出土している。いずれも口径が8㎝前後の小皿で、底部は回転糸切り手法がもちいられている。23は底部を含む外面に自然釉が付着し、器を倒置した状態で焼成されたと考えられる。

6・17・28・29・50～53は鉢である。口縁部の破片が多く形態も多彩である。いずれも外面口縁部が黒化し、重ね焼きの痕跡を残す。

17・51は、口縁端部を四角に作り出し、端部は若干上方に拡張し、端面に凹みをもつ鉢である。28・29・50は端部が内傾気味に上方に拡張する鉢である。29・50は口縁端部を内側に屈曲させている。28は口縁端部を幾分内側に傾けている。52は端部が上下方向に拡張し、とくに上方への拡張が著しい。

6・53は鉢の底部である。6の底部がしっかりした平底であるのに対し、53のそれは丸底状の底部をもち、新しい要素が認められる。

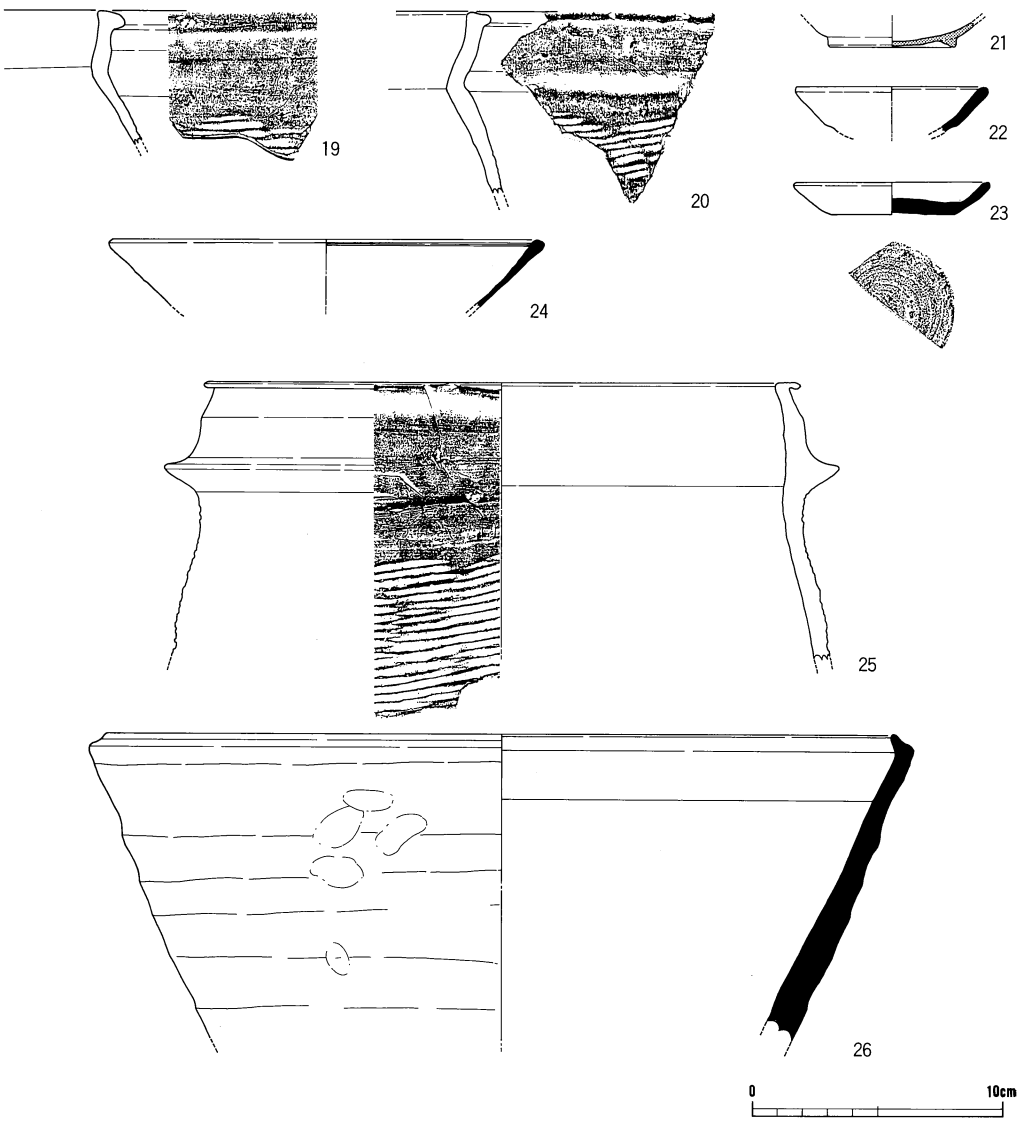
54は甕の口縁部である。端部は四角くおさめ、内面口縁部直下に沈線様の凹みが巡る。

丹波焼(9・11・12・18・26・55～72)

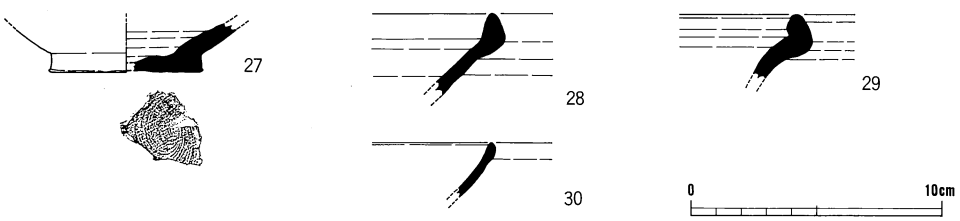
丹波焼は椀・鉢・瓶・甕が出土している。

55～58は椀である。いずれもロクロを使って成形している。口縁部外面は器面の発色が黒化しており、重ね焼きの痕跡を残す。55・56は底部がわずかに突出した円盤状高台をもち、57は平底の椀である。いずれも回転糸切り手法によって底部を切り離している。

11・12・26・59・60・64は鉢である。口縁部の細片が多く、全容は不明瞭であるが口縁部の形態は多彩である。9は口縁端部がわずかに内側に拡張する小型の鉢である。内面は丁寧にナ



第21図　その他柱穴出土土器



第22図　木棺墓、土坑１・２出土土器

デ調整されている。外面底部周縁にはヘラケズリが施され底部側面を整えている。11は口縁端部が玉縁様に肥厚している鉢である。12は端部が上方に尖り気味に拡張している。26は9と同様、口縁端部が内側に拡張する鉢である。9に比べ拡張した先端が鋭く尖っている。59は口縁端部がわずかに上下方向に拡張し、口縁端部外面に面をもつ鉢である。60は12に比べ口縁端部がさらに上方へ拡張し、口縁端部外面には凹線様の凹みをもつ鉢である。64は口径が10cmを測る小鉢である。口縁部は外反し、端部は外側に開き気味である。

61～63は擂鉢である、61・62は一回一条描きによる放射状の擂目をもつのに対し、63は櫛描きによる擂目が施され、近世の所産である。

65は瓶として報告しているが、小壺の可能性も考えられる底部破片である。外面にはオリーブ色の自然釉が掛かっている。

18・66～72は甕と考えられる。口縁部の形態から3つに大別される。

67は、口縁部が短く外反する甕である。内外面の端部直下に沈線が巡る。外面の沈線は内面のそれに比べ明瞭ではない。66・72は、67よりも口縁部が大きく外反し、口縁端部が上方に拡張する甕である。端部外面には沈線が認められず内面端部直下に67と同様沈線が巡る。72は割れ口に自然釉が付着しており、焼成時に破損したと考えられる甕である。おそらく破損した状態で本遺跡で使用されたと思われる。68は口縁端部外面に明瞭な沈線が巡る。18は口縁端部が上下方向に拡張し、外面に面をなす甕である。外面口縁端部直下に一条の沈線が巡る。

輸入陶磁器(30・73～75)

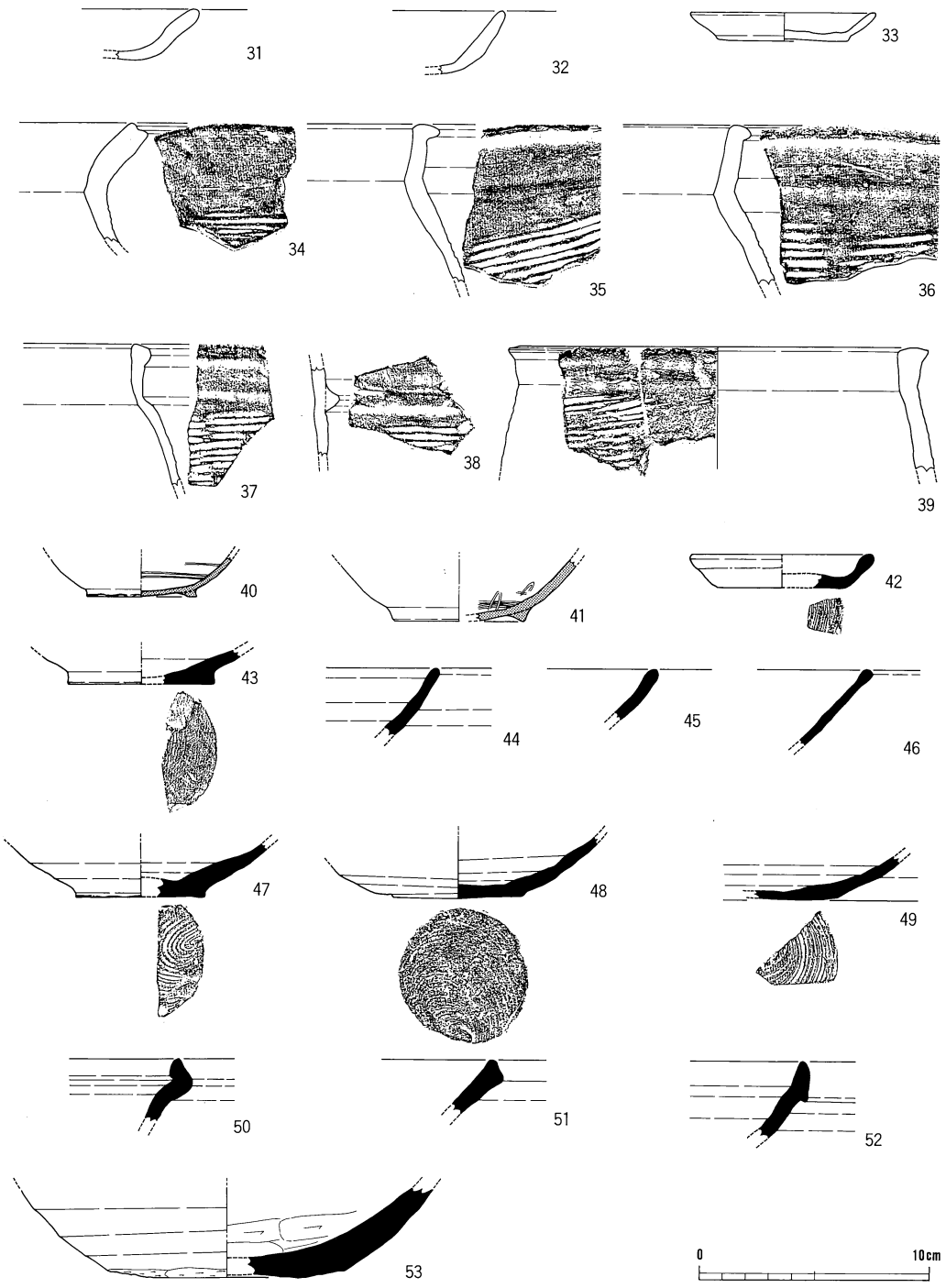
輸入陶磁器は白磁・青磁椀が出土している。30の白磁椀は小さな玉縁をもち、外面口縁部直下に凹線が巡り、口縁部と体部を画している。73・74は肥大した玉縁をもつ大型の白磁椀である。75は同安窯系の青磁椀の体部破片である。体部外面には18条1単位の櫛目が施され、体部下半は無釉である。内面はジクザク文が施されている。片刃彫りによる文様も刻まれるが、意匠については不明である。

鉄製品(76～80)

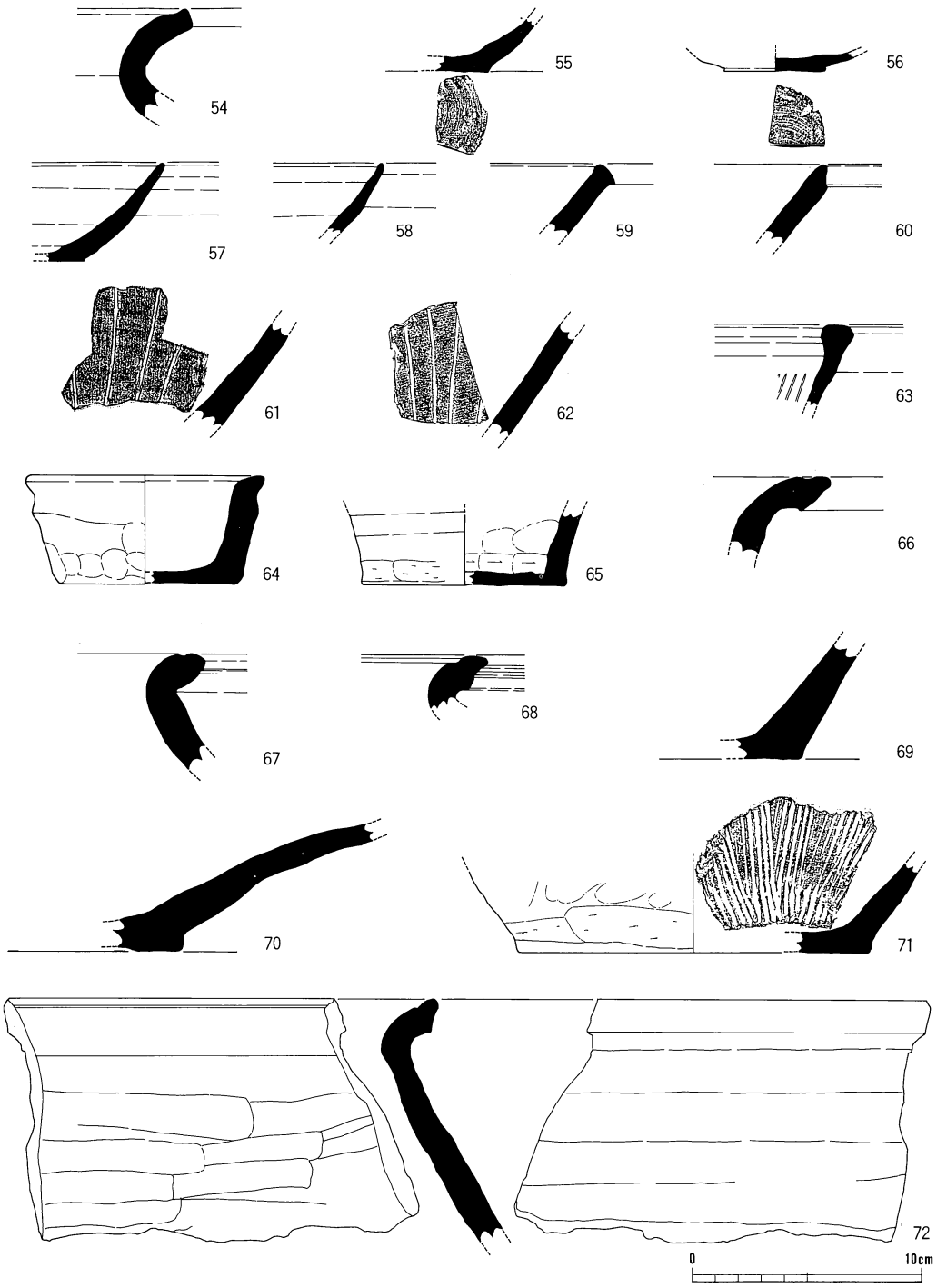
鉄製品は、鏃と考えられる76と釘4点(77～80)出土した。

76は先端を欠損し、断定ができないが鏃と考えられる製品である。中央部で幅広になり断面形は四角形で、下端と先端は断面径が円形を呈する。下端には木質部が残る。残存長は、17.5cm、幅は3～6mmを測る。重さは10.4gである。

77は身部先端部を欠損する。身部は若干曲がり、頭部は頭巻きを呈し使用されたものと推察される。身部の断面形は長方形を呈する。残存長は4.6cmを測る。重さは2.0gである。78は、頭部が延びた状態で、身部もまっすぐなところから未使用の釘と考えられる。身部の断面形は四角形を呈する。重さは2.2gである。79は頭部が延びた状態であるが、身部は曲がっており、再利用された可能性をもつ釘である。身部の上部は錆が進み部分的に欠損するが、ほぼ完形で

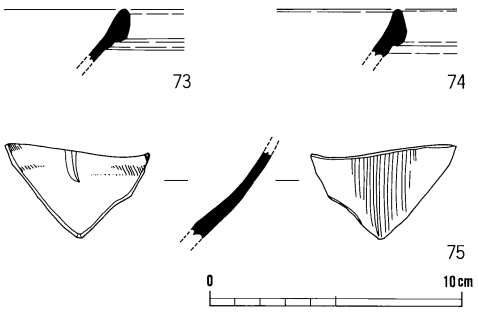


第23図　遊離土器（土師器・瓦器・須恵器）



第24図　遊離土器（須恵器・丹波焼）

ある。全長8.2cmで身部の断面形は四角形を呈する。重さは8.7ｇである。80は頭部と身部の先端を欠損する釘である。残存長4.7cm、重さは2.0ｇを測る。



第25図　遊離土器（輸入陶磁器）

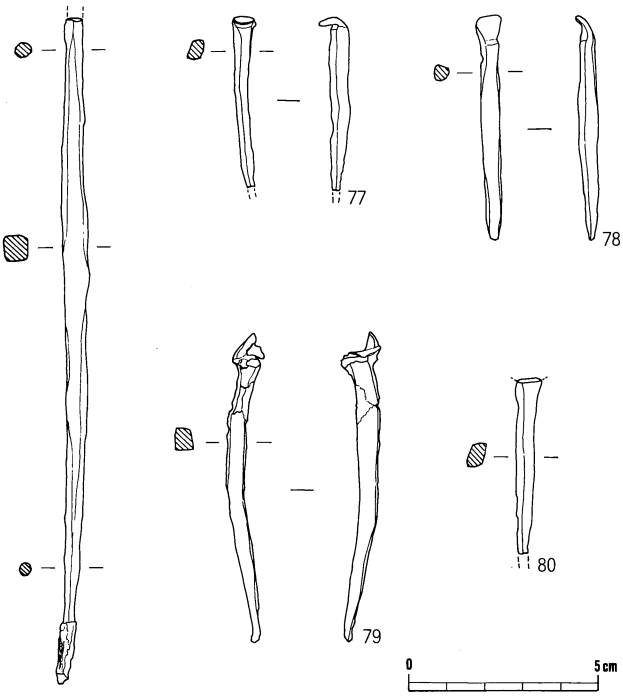
井根口遺跡からは、2,170点の土器が出土した。その内訳は、須恵器が最も多く、全体の60％を占める。続いて土師器が32％、丹波焼が５％、瓦器・輸入陶磁器が合わせて３％と続く。この比率は破片の個数をそのまま百分率に置き換えたもので、個々の器種構成等は不明である。ただ周辺の中世集落遺跡からの出土状況と比較すると丹波焼の出土量が多い点は特筆される。

土師器は皿・堝・羽釜が出土し、とくに堝の出土が多い。堝は完形になるものがなく、すべて口縁部の破片である。出土した堝のうちでも口縁部が「く」の字状に外反し、端部が外方に突出する堝が多い。このタイプの堝は県内では加東郡滝野町四ツ辻古墳群[①]、三田市溝ノ尾遺跡[②]、(土壙14)、県外では京都府福知山市大内城跡墳墓（ＳＸ300）[③]等で良好な出土例がある。溝ノ尾遺跡では14世紀後半の須恵器鉢が共伴し、大内城跡墳墓の堝は14世紀後半の年代が想定されている。口縁部のみの比較で問題が残るが、当遺跡出土の14・20・35・36の一群についてもとりあえず同様の年代を考えておきたい。同様に19・37の口縁端部が玉縁化した堝は、京都府福知山市山田館跡[④]の共伴資料をもとに14世紀前半の年代が想定されている。８・34の口縁端部が「く」の字状に外反する堝は上記した溝ノ尾遺跡の平安時代後期から鎌倉時代前期に比定される土壙15に出土例がある。本遺跡の一群も同様の時期と考え、前述した堝よりも時期的に遡ると理解したい。25の羽釜は前記した溝ノ尾遺跡土壙14で口縁端部が外方に突出する堝と共伴しており14世紀後半の時期が考えられる。

須恵器は椀と鉢が多く出土している。これらの須恵器を現在編年が確立されている東播系須恵器編年諸案に照らし合わせ時期を考えてみる。椀は43が底部をヘラ切り手法によって切り離している以外、すべて回転糸切り手法を用いている。内面見込みに凹みをもち、突出した円盤状高台をもつ15・27は森田編年[⑤]の第Ⅶ期第１段階に相当し、11世紀後半の時期と考えられる。また平底化し、内面に凹みを持たない５は第Ⅷ期第２段階の範疇で捉えられ12世紀末から13世紀前半の時期が与えられる。他の平底椀（４・48・49）は口縁部を欠くため確定はできないが、おそらく５と同様の時期が考えられる。

鉢は口縁部を上方に若干つまみあげる17・51を、山中編年[⑥]のＢ１類期の範疇で捉え、13世紀初頭と理解する。口縁端部が上下に拡張し、とくに上方への拡張が著しい52は、Ｃ３類期に相当し13世紀後半の時期が考えられる。28・29・50はD類期の範疇に収まり14世紀代と理解する。

丹波焼は椀・鉢・瓶・甕が出土している。椀は底部、口縁部の破片で不明瞭な点が多い。ただ底部に注目すると、わずかに突出した円盤状高台をもつ55・56の椀と平底の椀に大別できる。丹波焼の編年のなかで、両者の違いが時間差をあらわすかについては充分検討されているとは言えない。しかし須恵器椀のように時間的差を認めるとすれば、55・56の一群より57の椀が新しい要素を具備している。55・56の一群は鎌倉時代初頭と考えられている三本峠北窯の灰原調査で出土している[7]。おそらく三本峠周辺で焼かれたもので、鎌倉時代前半のなかにおさまると理解したい。また57はこれに続く時期と考えられる。



第26図　鉄製品

26は口縁端部が内側に屈曲する鉢で、稲荷山窯期[8]に相当し14世紀代と考えられる。9は三本峠周辺で焼かれた鉢と考えられ、鎌倉時代の所産であろう。

18の口縁部が上下に拡張する甕は、大内城跡の墳墓（ＳＸ300-E）より出土している。この中世墳墓は平安時代末期から南北朝時代まで継続して造墓行為が行われ、丹波焼甕が蔵骨器として使用された時期は鎌倉時代後期と推定されている。

66・72の口縁端部が上方に拡張する甕は近隣では多紀郡西紀町沢ノ浦古墳群[9]、京都府福知山市山田館跡の中世墳墓（ＳＸ01-A）などから出土している。これらの甕は三本峠周辺で焼かれたと推定され、13世紀代のものと考えられる。また67・68は、稲荷山窯期に比定され、14世紀代のものと考えられる。

井根口遺跡から出土した土器は平安時代後期から南北朝時代まで幅広く出土しているが、その中心は鎌倉時代から南北朝時代にかけての時期である。

註）

① 細川和明・森下大輔　『四ツ辻古墳群』加東郡教育委員会　1989

② 久保弘幸　『溝ノ尾遺跡』（青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)）兵庫県教育委員会　1988

③ 伊野近富他　『大内城跡』（京都府遺跡調査報告書第3冊）㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1984

④ 伊野近富他　『山田館跡』（京都府遺跡調査概報第6冊）㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983

⑤ 森田　稔　「東播系須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号　1986

⑥ 山中　進　「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出－神出古窯址群に関連する遺跡群の調査－』　妙見山麓遺跡調査会　1986

⑦ 大村敬通　『三本峠北窯調査報告書』　兵庫県教育委員会　1980

⑧ 大槻　伸　「丹波」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館　1977

⑨ 池田正男・市橋重喜　『沢の浦古墳群』　兵庫県教育委員会　1987

出 土 土 器 観 察 表

掘立柱建物跡1出土土器

番 号	出土位置	器 種 器 形	法 量 (cm)			技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径		
1	Ⅰ 区 P10	須恵器 椀	——	(3.0)	——	粘土紐巻き上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。	普通 内外面 N7/0 粗砂～礫多量 口～体部1/8 残
2	Ⅰ 区 P10	須恵器 椀	——	(4.0)	——	粘土紐巻き上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面が黒化している。	普通 内外面 N6/0 粗砂～礫多量 口～体部1/8 残
3	Ⅰ 区 P10	須恵器 椀	——	(3.5)	——	粘土紐巻き上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面が黒化している	不良 内外面10Y8/0 中砂多量 口～体部1/8 残
4	Ⅰ 区 P10	須恵器 椀	——	(2.4)	——	粘土紐巻き上げ（左回り）成形。内外面とも回転ナデ調整。底部回転糸切り手法を施す。	普通 内外面 N7/0 粗砂～礫少量 体～底部残
5	Ⅰ 区 P10	須恵器 椀	15.8	4.2	5.4	粘土紐巻き上げ（右回り）成形。内面底部との境に僅かに段をもつ。体部上位に円孔が認められるが、焼成時に椀中の礫が弾け飛んで生じたと思われる。内外面とも回転ナデ調整。底部回転糸切り手法を施す。	普通 内外面 N7/0 粗砂～礫少量 口縁部一部欠損
6	Ⅰ 区 P 2	須恵器 こね鉢	——	(3.6)	(12.2)	粘土紐巻き上げ成形。外面体部下位、横位の指ナデ→横位のケズリ調整。底部、不定方向のナデ。内面は使用による磨滅著しく調整不明。	良好 内外面 N7.5/0 粗砂～礫少量 底部1/2 残

掘立柱建物跡2出土土器

番 号	出土位置	器 種 器 形	法 量 (cm)			技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径		
7	Ⅶ 区 P12	土師器 皿	(12.0)	(3.0)	(6.5)	内外面とも磨滅著しく、調整不明。	普通 内外面 10YR8/2 粗砂～礫多量 口～体部1/4 残
8	Ⅶ 区 掘立柱建物跡2 P 2 掘立柱建物跡3 P27	土師器 塝	(20.6)	(4.8)	——	口縁部、内外面とヨコナデ調整。	良好 内外面 2.5Y8/4 礫多量 口縁部1/5 残
9	Ⅶ 区 P18	丹波焼 鉢	——	(7.9)	——	外面口縁部、ヨコナデ調整。体部下位、横位のケズリ調整。内面口縁部、ヨコナデ→体部、斜位のナデ。	不良 内外面 5YR8/4 マンガン粒・粗砂少量 口～体部1/8 残

掘立柱建物跡２出土土器

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
10	Ⅶ区 P19	須恵器 椀	——	(5.0)	——	粘土紐巻き上げ（右回り）成形。内外面とも回転ナデ調整。口縁・体部の一部が赤褐色に発色。	良好 外面 10R4/3 内面 N5/0 長石・粗砂少量 口～体部1/8 残
11	Ⅶ区 P20 Ⅶ区北半 第3・6・7層	丹波焼 鉢	——	(3.0)	——	口縁端部外面、回転ナデ調整。体部、横位のユビナデ調整。内面、回転ナデ調整。	良好 内外面 2.5YR5/3 中砂少量 口縁部破片
12	Ⅶ区 P13	丹波焼 鉢	——	(3.0)	——	内外面、回転ナデ調整。	良好 内外面 5YR6/4 長石・粗砂多量 口縁部1/8 残

掘立柱建物跡３出土土器

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
13	Ⅶ区 P36	土師器 堝	——	(6.8)	——	外面口縁部、ヨコナデ。体部、平行のタタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、ケズリ調整の痕跡。外面は、使用による加熱のため赤化、ススが付着している。	不良 内外面 7.5YR8/6 粗砂～礫多量 口縁部1/6 残
14	Ⅶ区 P29	土師器 堝	——	(5.5)	——	外面体部、左上がりのタタキ→口縁部、２段のヨコナデ調整。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、横位のナデ調整。	良好 外面 10YR7.5/3 内面 10YR8/6 中砂少量 口～体部破片
15	Ⅶ区 P41	須恵器 椀	——	(1.6)	4.4	円盤状高台。内面底部に明瞭な段をもつ。底部は、回転糸切り手法後、高台側面の再調整はなし。内外面とも回転ナデ調整。	良好 内外面 N8/0 細砂少量 底部残
16	Ⅶ区 P36	須恵器 皿	8.4	1.2	5.8	底部糸切り手法。外面口縁部、ヨコナデ調整。内面口縁部、ヨコナデ調整。内面底部周縁は、強いヨコナデ調整のため凹みをもつ。底部、不定方向のナデ調整。	普通 内外面 N6.5/0 粗砂～礫多量 完形
17	Ⅶ区 P30	須恵器 こね鉢	——	3.6	——	外面口縁部、黒化している。内外面とも回転ナデ調整。	不良 内外面 N7/0 粗砂多量 口縁部破片
18	Ⅶ区 P37	丹波焼 甕	——	(4.5)	——	口縁部内外面、回転ナデ調整。口縁端部部外面に一条の凹線が巡る。	普通 内外面 10Y5.5/1 粗砂少量 口縁部破片

その他の柱穴内出土土器

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
19	Ⅶ区 P98	土師器 堝	——	(5.1)	——	外面体部、平行タタキ→口縁部、2段のヨコナデ調整。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、横位のナデ。外面スス付着。	良好 外面7.5YR7.5/4 内面5YR7/6 粗砂少量 口～体部1/8 残
20	Ⅵ区 P101	土師器 堝	——	(6.6)	——	外面体部、右上りのタタキ→口縁部、ヨコナデ調整。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、横位のナデ調整。	非常に良好 外面2.5YR5/2 内面2.5YR5/4 粗砂～礫多量 口～体部1/8 残
21	Ⅶ区 P55	瓦器 椀	——	(0.9)	(5.0)	張り付け高台。内外面、磨滅著しく調整不明。	不良 内外面N3/0 精良 底部1/3 残
22	Ⅰ区 P144	須恵器 Ⅲ	(7.6)	(1.8)	——	内外面とも回転ナデ調整。	普通 内外面N6.5/0 細～中砂多量 口縁部1/4 残
23	Ⅶ区 P34	須恵器 Ⅲ	(7.8)	1.3	(4.8)	底部回転糸切り手法。口縁端部に一条の凹線が巡る。内外面、回転ナデ調整。内面底部は不定方向のナデ調整。外面に自然釉付着し、内面は無釉。口縁先端部に自然釉の明瞭な境がある。	不良 外面N3/0 内面N6/0 マンガン粒少量 口～底部1/2 残
24	Ⅶ区 P27	須恵器 椀	(17.0)	(2.6)	——	粘土紐巻き上げ成形。内面口縁部に一条の凹線が巡る。内外面とも回転ナデ調整。外面口縁部、黒化している。	良好 内外面N8/0 細砂少量 口縁部1/4 残
25	Ⅶ区 P94	土師器 羽釜	(23.8)	(10.9)	——	外面口縁部、ヨコナデ調整。体部、平行タタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、同心円文→横位のナデ調整。外面体部スス付着。	良好 外面10R6/6 内面2.5YR6/6 中砂少量 口～体部1/3 残
26	Ⅶ区 P63 第3・6・7層	丹波焼 鉢	(30.9)	(12.1)	——	粘土紐巻き上げ成形。内外面とも磨滅のため調整不明瞭。外面口縁～体部上位、ヨコナデ調整。体部、斜位のナデ・ユビオサエ調整の痕跡あり。	やや不良 内外面2.5Y8/3 粗砂～礫少量 口～体部1/3 残

木棺墓・土坑1・2出土土器

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
27	Ⅶ区 木棺墓	須恵器 椀	——	(2.0)	(6.0)	粘土紐巻き上げ成形。底部は円板状高台で回転糸切り手法。内面底部に明瞭な段が認められる。内外面とも回転ナデ調整。高台側面の再調整なし。	普通 内外面N7.5/0 細～中砂少量 底～体部1/6 残

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
28	Ⅶ区 木棺墓	須恵器 こね鉢	——	(3.2)	——	外面口縁部、重ね焼きのため黒化している。内外面とも回転ナデ調整。	普通 内外面 N7/0 細砂少量 口縁部1/6 残
29	Ⅶ区 土坑1	須恵器 こね鉢	——	(2.5)	——	外面口縁部、重ね焼きのため自然釉付着。内外面とも回転ナデ調整。	普通 内外面 N7/0 細～礫多量 口縁部破片
30	Ⅵ区西端 土坑2	白磁 椀	——	(2.1)	——	内外面とも透明釉が施され、細かな貫入が認められる。外面口縁部直下に凹線様の窪みが巡る。	良好 釉色 5Y8/2 緻密 口縁部破片

遊離土器

番号	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
31	Ⅶ区 第3・6・7層	土師器 Ⅲ	——	(2.2)	——	内外面ともに磨滅著しく、調整不明。	普通 内外面 7.5YR8/2 中～粗砂少量 口～底部1/6 残
32	Ⅶ区北半 第3・6・7層	土師器 Ⅲ	——	(2.7)	——	内外面ともに磨滅著しく、調整不明。	普通 内外面 7.5Y8/1 粗砂極少量 口～底部1/6 残
33	Ⅶ区北半 第3・6・7層	土師器 Ⅲ？	8.2	1.3	5.6	底部糸切り手法。内外面磨滅著しく調整不明。器形、技法は須恵器である。	普通 内外面 5YR8/4 粗砂・石英少量 口縁部一部欠損
34	Ⅱ区 落ち込み	土師器 塝	——	(5.1)	——	口縁端部に一条の凹線が巡る。外面口縁部ヨコナデ調整。頚部、ユビオサエ調整。体部、平行タタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、ヘラケズリ調整？。	普通 内外面 5YR8/3.5 粗砂多量 口縁部1/8 残
35	Ⅶ区 第3・6・7層	土師器 塝	——	(6.8)	——	外面口縁部、2段のヨコナデ調整。体部、右上がりのタタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、横位のナデ調整。外面口縁～体部、スス付着。	普通 外面 7.5YR8/4 内面 7.5YR8/8 石英・粗砂多量 口～底部1/8 残
36	Ⅶ区北半 第3・6・7層	土師器 塝	——	(6.9)	——	外面口縁部、2段のヨコナデ調整。体部、右上がりのタタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、同心円文→横位のナデ調整。	普通 外面 5YR6/0 内面 5YR7/6 石英・粗砂多量 口～体部1/8 残
37	Ⅶ区 第3・6・7層	土師器 塝	——	(6.1)	——	外面口縁部、ヨコナデ調整。体部、平行タタキ。内面口縁部、ヨコナデ調整。体部、不定方向のナデ調整。外面に斑文状にスス付着。	普通 外面 5YR6/0 内面 5YR7/6 石英・粗砂多量 口～体部1/8 残

番号	出土位置	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
38	Ⅵ区西端 第３・６層	土師器 羽釜	——	(3.9)	——	外面口縁部、断面三角形の鍔を張り付けている。外面体部、平行タタキ。内面は、横位のナデ調整。	普通 外面 10YR8/4 内面 10YR8/4.5 粗砂～礫多量 口～体部破片
39	Ⅰ　区 第６・７層	土師器 堝	(16.6)	(5.3)	——	外面口縁～体部、右上がりのタタキ→口縁部、ヨコナデ調整。内面口縁～体部、ヨコナデ調整。	不良 外面 7.5YR3.5/1 内面 7.5YR5.5/1 粗砂～礫･石英多量 口～体部1/8 残
40	Ⅶ区北半 第3・6・7層	瓦　器 椀	——	(1.7)	(4.8)	底部は、断面形が台形を呈する張り付け高台。外面は剝落し調整不明。内面体部に螺旋状の暗文の痕跡あり。	不良 外面 N7/0 内面 7.5Y8/2 精良 底部1/4 残
41	Ⅶ区北半 第3・6・7層	瓦　器 椀	——	(2.7)	(5.6)	底部は、断面形が三角形を呈する張り付け高台。外面は磨滅のため調整不明。内面体部密な螺旋状の暗文→底部、鋸歯状の暗文。	不良 内外面 7.5Y8/1 精良 底部1/3 残
42	Ⅶ　区 第3・6・7層	須恵器 皿	(7.8)	1.4	(5.6)	底部は回転糸切り手法。内外面、回転ナデ調整。	普通 内外面 5B7/1 中砂極少量 口～体部1/5 残
43	Ａトレンチ 東端 整地層	須恵器 椀	——	(1.5)	(6.4)	底部は、ヘラ切り手法を用いた円盤状高台である。内外面ともに回転ナデ調整を施し高台側面は、底部切り離し後、回転ナデ調整を施す。	普通 内外面 N7.5/0 中砂極少量 口～底部1/3 残
44	Ⅵ　区 第３・６層	須恵器 椀	——	(2.9)	——	焼成不良のため土師質。内外面とも丁寧な回転ナデ調整	不良 内外面 2.5Y7/8 中砂極少量 口～体部破片
45	Ⅳ　区 落ち込み	須恵器 椀	——	(2.1)	——	外面口縁部、黒化している。	良好 内外面 N6.5/0 中砂多量 口縁部1/8 残
46	Ⅱ　区 落ち込み	須恵器 椀	——	(3.2)	——	粘土紐巻き上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。	やや不良 内外面 N6/0 粗砂～礫少量 口～体部1/8 残
47	Ⅳ　区 第２層	須恵器 椀	——	(2.3)	(5.6)	底部は回転糸切り手法。内外面とも回転ナデ調整。底部側面の再調整なし。	良好 内外面 N8/0 中砂少量 底部1/4 残
48	Ⅶ区東側 第3・6・7層	須恵器 椀	——	(2.7)	5.6	粘土紐巻き上げ成形（右回り）。底部は回転糸切り手法。底部側面の再調整なし。内外面とも回転ナデ調整。内面底部、不定方向のナデ調整。	普通 内外面 N7/0 礫少量 体～底部残

番号	出土位置	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
49	Ⅲ区 落ち込み	須恵器 椀	——	(2.0)	——	粘土紐巻き上げ成形。底部は回転糸切り手法。内外面とも回転ナデ調整。	普通 内外面 N7.5/0 中砂少量 体～底部1/6 残
50	Ⅶ区 第3・6・7層	須恵器 こね鉢	——	(2.7)	——	内外面ともに回転ナデ。外面口縁部、黒化している。内面口縁部と体部との境に沈線様の凹みが巡る。	普通 内外面 N7.5/0 中砂少量 口～体部破片
51	Ⅵ区 第2層	須恵器 こね鉢	——	(2.4)	——	内外面ともに回転ナデ。外面口縁部部、黒化している。	普通 内外面 N6/0 マンガン粒・中砂少量 口～体部破片
52	Ⅵ区西端 第3・6層	須恵器 こね鉢	——	(3.4)	——	内外面は回転ナデ調整か？外面口縁部、重ね焼きのために黒化している。	普通 外面 N6.5/0 内面 N7/0 粗砂多量 口～体部破片
53	Ⅶ区北側 第3・6・7層	須恵器 こね鉢	——	(3.8)	(10.4)	粘土紐巻き上げ成形（左回り）。外面体部は、ナデ調整。底部周縁部は、ヘラケズリ調整。内面底部周縁部は横位のユビナデ調整。	不良 外面 N6.5/0 内面 N5.5/0 粗砂～礫多量 底部破片
54	不明 第2層	須恵器 甕	——	(4.7)	——	内外面ともに回転ナデ。	普通 外面 N5/0 内面 N7/0 中砂極少量 口縁部破片
55	Aトレンチ 東端 整地層	丹波焼 椀	——	(2.3)	——	内外面ともに回転ナデ。内面に自然釉が付着する。	普通 外面 5Y4/1 内面 7.5GY7/1 (釉色) 粗砂～礫多量 口～大部1/8
56	Ⅵ区 第3・6層	丹波焼 椀	——	(0.8)	(4.4)	轆轤成形か？。底部は回転糸きり手法を用い、底部側面の再調整はない。内外面、回転ナデ調整。	良好 外面 10R5/2 内面 10R6/8 マンガン粒・中～粗砂極少量 底部1/4 残
57	Ⅶ区北西隅 第3・6・7層	丹波焼 椀	——	(4.3)	——	轆轤成形か？。底部回転糸切り手法を用いている。外面体部、回転ナデ→体部下位、ユビオサエ調整。内面体部は、回転ナデ調整を施している。口縁部外面、1 cm幅で茶褐色に変色している。	良好 外面 2.5YR6/8 内面 5YR5/2 マンガン粒・長石多量 口～底部1/8 残
58	拡張区 第7層	丹波焼 椀	——	(3.0)	——	轆轤成形か？。内外面とも回転ナデ調整。	やや不良 外面 2.5YR5/3.5 内面 7.5YR6/3.5 礫極少量 口～体部1/8 残
59	拡張区 第7層	丹波焼 鉢	——	(3.0)	——	内外面とも回転ナデ調整。	普通 外面 2.5YR4/3 内面 2.5Y4/1 粗砂～礫少量 口縁部破片

番　号	出土位置	器種 器形	法　量（cm）			技　法　の　特　徴	備　考
			口　径	器　高	底　径		
60	Ⅵ区西端 第3・6・7層	丹波焼 鉢	——	(3.4)	——	口縁～体部外面、回転ナデ調整。口縁部内面、回転ナデ調整→体部、斜位のナデ調整。口縁部外面、黒化している。	やや良好 外面 2.5YR6/8 内面 10YR5/1 粗砂～礫少量 口縁部破片
61	Ⅲ　区 第４・６層	丹波焼 擂　鉢	——	(4.4)	——	体部外面、横・斜位ナデ。体部内面、横位ナデ調整→一回一条描きの擂目を施す。	やや良好 外面 5YR7/6 内面 5YR7/4.5 粗砂～礫少量 体部破片
62	Ⅲ・Ⅳ区南側 第４・６層	丹波焼 擂　鉢	——	(5.0)	——	体部外面、ナデ調整。体部内面、横位ナデ調整→一回一条描きの擂目を施す。	やや良好 外面 2.5YR5/8 内面 2.5YR7/2.5 粗砂～礫少量 体部破片
63	Ａトレンチ 東端 整地層	丹波焼 擂　鉢	——	(3.5)	——	内外面、回転ナデ調整。内面に４本以上一単位の櫛描きの擂目を施す。	不良 外面 7.5R4/4 内面 10R5/3 長石多量 口縁部破片
64	Ａトレンチ 東端 整地層	丹波焼 小　鉢	(10.0)	4.7	(7.4)	口縁部外面、ヨコナデ調整。体部、横位ナデ→ユビオサエ調整。内面は自然釉が付着し調整不明。外面は無釉。	不良 内外面 7.5R5/4 マンガン粒・中砂少量 口～体部1/2 残
65	Ⅶ　区 第２層	丹波焼 瓶？	——	(3.1)	(8.8)	外面体部下位、ケズリ様のナデ調整。内面体部、ユビオサエ調整→底部周縁、横位の強いナデ調整を施す。体部外面にはオリーブ色の自然釉が垂れる。	やや不良 外面 5Y4/2 内面 2.5YR6/3.5 マンガン粒多量 中～粗砂極少 底～体部 1/2残
66	拡張区 第７層	丹波焼 甕	——	(3.3)	——	口縁部内外面、回転ナデ調整。内面口縁端部に１条の沈線が巡る。	良好 外面 5YR4/1 内面 10YR5/1 粗砂多量 口縁部破片
67	拡張区 第７層	丹波焼 甕	——	(5.0)	——	口縁～体部外面、回転ナデ調整。内面体部、横位のナデ調整。口縁部内外面に１条の沈線が巡る。ゴマ状の自然釉が付着。	やや不良 外面 2.5YR5/3 内面 7.5YR6/3 礫極少量 口～体部1/8
68	Ⅲ　区 第４・６層	丹波焼 甕	——	(2.3)	——	口縁部内外面、回転ナデ調整。口縁外面に２条の沈線が巡る。内面口縁部直下に一条の沈線が巡る。	良好 外面 2.5YR4/4 内面 2.5YR5/1 細砂極少量 口縁部破片
69	Ⅶ　区 第3・6・7層	丹波焼 鉢	——	(5.0)	——	体部外面、ユビオサエ調整→横位のナデ調整→体部下位、ケズリ様のナデ調整。内面は使用時の磨滅が著しい。	良好 内外面 10R6/4 粗砂～礫多量 底部破片
70	Ⅶ　区 落ち込み	丹波焼 甕	——	(5.5)	——	粘土紐巻き上げ成形。体部外面、横位・不定方向のナデ→ユビオサエ調整。	やや不良 外面 7.5R4/6 内面 5Y8/3 マンガン粒・粗砂～礫少量 底～体部破片

番号	出土位置	器種 器形	法量(cm) 口径	器高	底径	技法の特徴	備考
71	Aトレンチ 東端 整地層	丹波焼 擂鉢	——	(3.9)	(15.2)	体部外面、ユビオサエ調整の凹凸が顕著に認められる。体部下位にはケズリ様の横位のナデ調整が施される。内面体～底部にかけて、4本一単位の櫛描条線を放射状に施す。	やや不良 外面7.5YR7/2 内面7.5YR7.5/4 長石・石英多量 底部1/6 残
72	Ⅶ区北西隅 第3・6層	丹波焼 甕	——	(11.5)	——	粘土紐巻き上げ成形。口縁～体部外面、自然釉のため調整不明。口縁部内面、回転ナデ調整。体部、横位ナデ調整。内面口縁端部直下に1条の沈線が巡る。外面の自然釉は剝落が著しい。	不良 外面7.5Y5/3 (釉色) 内面2.5YR4/4 石英・マンガン粒少量 口～体部1/8 残
73	Ⅲ区 第4・6層	白磁 椀	——	(2.1)	——	内外面とも施釉。	普通 内外面2.5GY8/1 (釉色) 精良 口縁部破片
74	Ⅳ～Ⅵ区 第2層	白磁 椀	——	(1.9)	——	内外面とも施釉。	普通 内外面2.5GY8/1 (釉色) 精良 口縁部破片
75	Ⅶ区北半 第3・6・7層	青磁 椀	——	(3.4)	——	釉は非常に薄く、透明度は高い。体部外面に細かい櫛目(18本1単位)をもつ。体部下端は無釉である。内面は片刃彫りの痕跡と、櫛によるジグザグ文様の痕跡が認められる。	良好 内外面5GY7/1 (釉色) 精良 体部破片

※ 法量の( )は、口径・底径が復元数値をあらわし、高さは、残存高をあらわす。
備考欄の記入事項は、上より焼成、色調、胎土、その他の事項である。色調は㈶日本色彩研究所 色票監修の「新版標準土色帖」によった。

第４章　小野原庄内の遺跡

今田町教育委員会　　河　野　克　人

第１節　調査に至る経過

今田町教育委員会では、今田町上小野原地区における団体営ほ場整備事業に伴い、昭和63年２月20日から同年３月31日まで埋蔵文化財分布調査を実施したところ、当該地において広範な須恵器の散布が認められた。これについて、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課指導係（当時）と遺跡の取り扱いについて協議の結果、確認調査の必要性があるとの指導を受け、昭和63年７月より埋蔵文化財発掘調査を実施するに至った。以下、当該地における各遺跡の概要について説明する。

第２節　有安（ありやす）遺跡

今田町上小野原字有安ノ坪に位置する。標高約222～223ｍの微高地上に立地する。

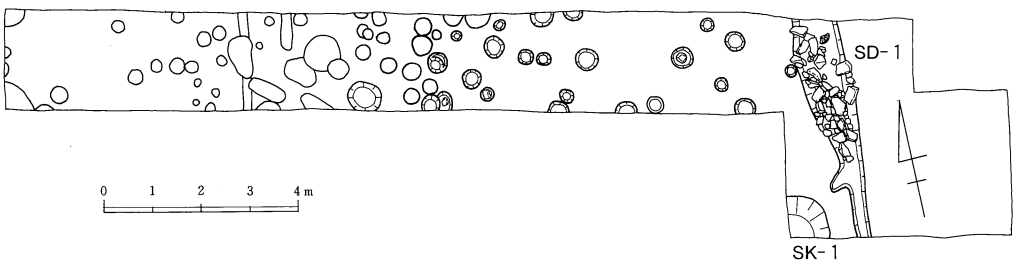
調査はグリッド18箇所とトレンチ１箇所の予定で実施し、遺構及び遺物を検出した時点で随時拡張調査を行った。調査の結果、No.１トレンチで溝、土坑、柱穴を検出した。

溝１

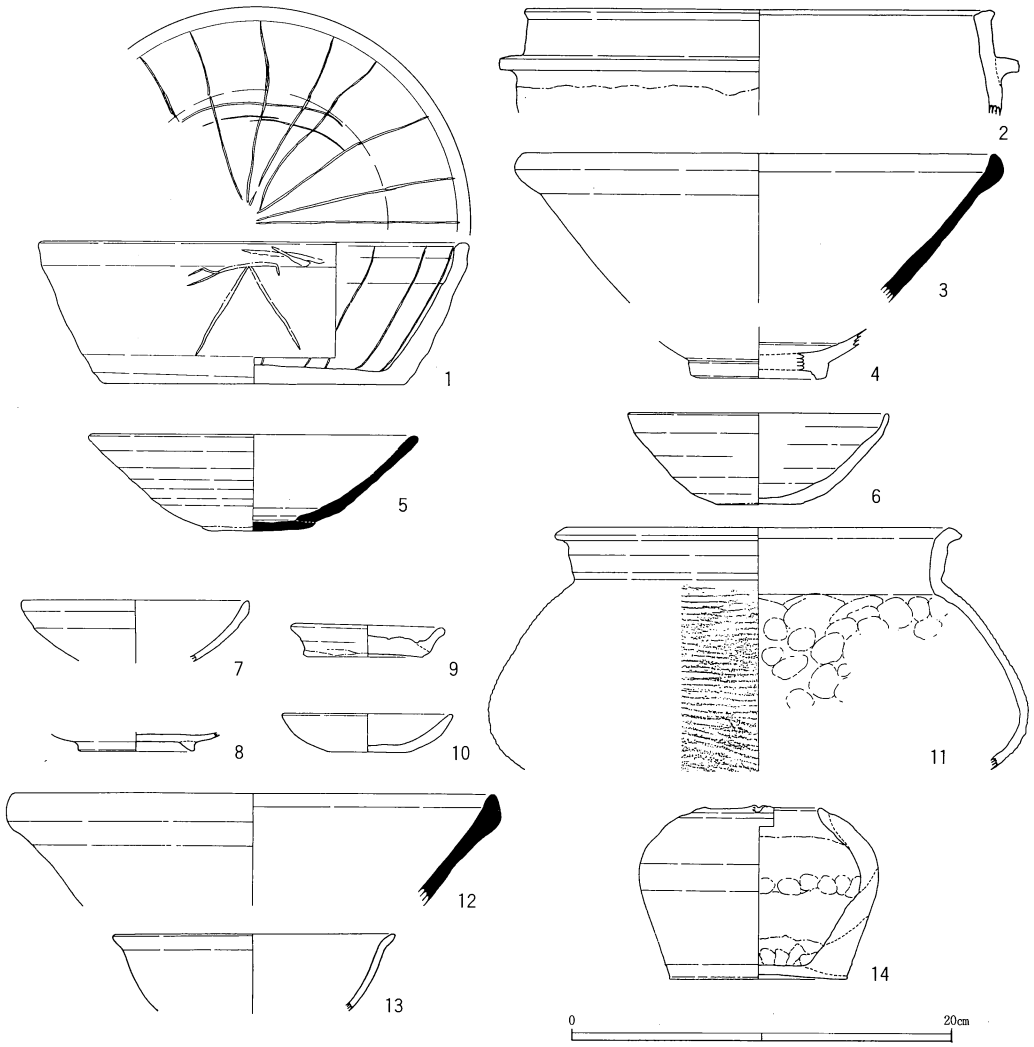
No.１トレンチ東端において検出した。検出幅は約20cm～１ｍで北側へ広くなっている。深さは10cmと浅く、溝内では人頭大の自然石が投棄された状態で検出された。土坑および柱穴群が溝１より西側に集中している状況から判断して、建物敷地等の境界の溝と推定される。遺物（１）は丹波焼摺鉢である。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリをおこない、内面にヘラ描きの摺目をもつ。体部外面にはヘラ描きの窯印を施す。

土坑１

No.１トレンチの東側、南西隅において検出した。平面は円形を呈すると考えられ、深さは約40cmで断面は逆台形を呈する。



第27図　１トレンチ平面図



第28図　有安遺跡出土遺物

遺物(2)は丹波焼羽釜である。鍔部はほぼ水平で、口縁部は若干内向して立ち上がり、口縁端部は平坦な面を持ち、外方へつまみ出す。内面はヨコナデ調整を施す。(3)は須恵器片口鉢である。口縁部は外面丸味をもち、端部を上方へつまみ上げる。(4)は白磁椀の底部である。ケズリ出しの高台をもち、内面を施釉する。見込み部分に一条の沈線を巡らす。

柱穴群

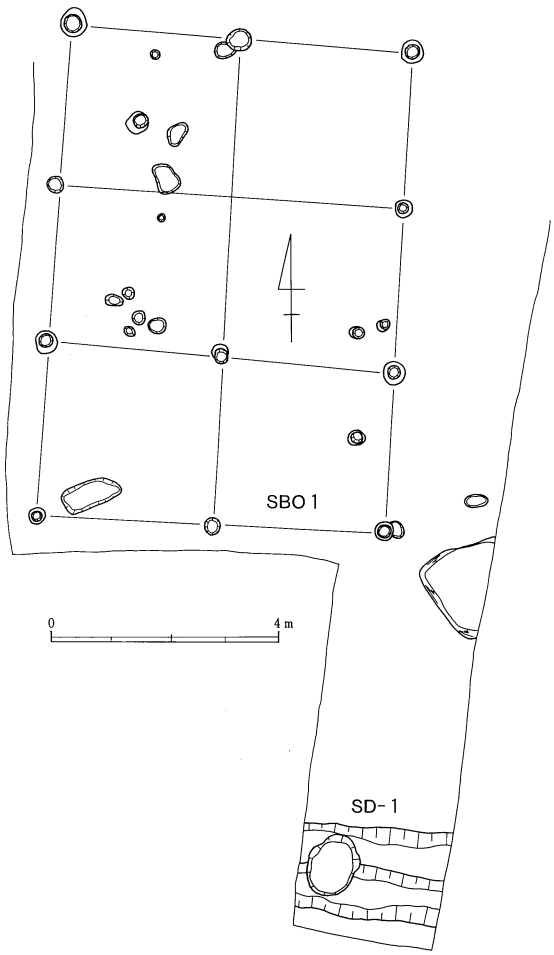
No.1トレンチにおいて60箇所検出しており、このうち24箇所を調査した。また3箇所の柱穴で根石を確認している。直径は約20cm～60cmで柱列の並びは不明である。

遺物(5)は高台を持たない平底の須恵器椀で、焼成は軟質である。体部は外方へ開き、口縁

部は若干厚みを増し丸くおさめる。底部は回転糸切りである。(6)は丹波焼椀である。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部はかるくつまみ上げている。底部は回転糸切りである。

包含層の遺物

(7・8)は瓦器椀である。(7)は口縁端部をつまみ上げ、尖り気味に仕上げている。(8)は底部で高台は逆三角形状の断面を呈する。いずれも磨耗が著しく調整痕は不明である。(9)は丹波焼堝である。口縁部は垂直に近く立ち上がり、端部は外傾し平坦面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で体部は外面に平行タタキ、内面に指頭圧痕をのこす。(10)は黒色土器A類の小皿で、磨耗が著しい。底部に回転糸きり痕をもつ。(11)は土師質小皿である。内外面ともナデ調整を施す。(12)は須恵器片口鉢である。口縁部外面は丸味をもち、端部は上方へつまみ上げている。(13)は青磁椀である。体部は緩やかに膨らみを持ち、口縁部は強く外反する。(14)は丹波焼片口小壺である。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリを施す。体部はやや外方へ直線的に立ち上がり、肩部から緩やかに膨らみを持ちながら内彎し、口縁部に達する。口縁部は内方につまみ上げ、端部は工具により注口をつける。肩部に淡灰緑色の自然釉を被る。



第29図　Aトレンチ平面図

第3節　井根口(いねくち)遺跡

今田町上小野原字井根口周辺に位置する。扇状地内の微高地上に立地しており、標高は約224～228mを測る。

調査の結果、Aトレンチで掘立柱建物跡1棟、溝1条、Bトレンチで掘立柱建物跡1棟、落ち込み状遺構1箇所を検出した。

掘立柱建物跡1（ＳＢ－１）

調査区東南部に位置する。Aトレンチにおいて確認した。規模は梁行2間（6m）、桁行3間（8.2m）の総柱建物跡である。建物の桁方向は南北（Ｎ5°Ｅ）にとる。中央北より2本目の柱は検出されなかった。柱穴の掘り方は24cm～40cm

で不正円形を呈する。桁行の柱間は2.6ｍ～2.9ｍ、梁の柱間は2.8ｍ～2.9ｍを測る。

遺物はピットから出土しており、２点が実測できた。(１)は須恵器椀である。底部は上方に立ち上がり、見込みの凹みは大きい。体部は緩やかに膨らみをもち口縁部は外反する。体部に強いヨコナデ調整を施す。底部は回転糸切りで、焼成は軟質である。(２)は土師質塊である。口縁部は外反して立ち上がり、端部は外傾し平坦面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で体部外面は平行タタキによって成形されている。焼成は軟質で胎土に砂粒が散見される。

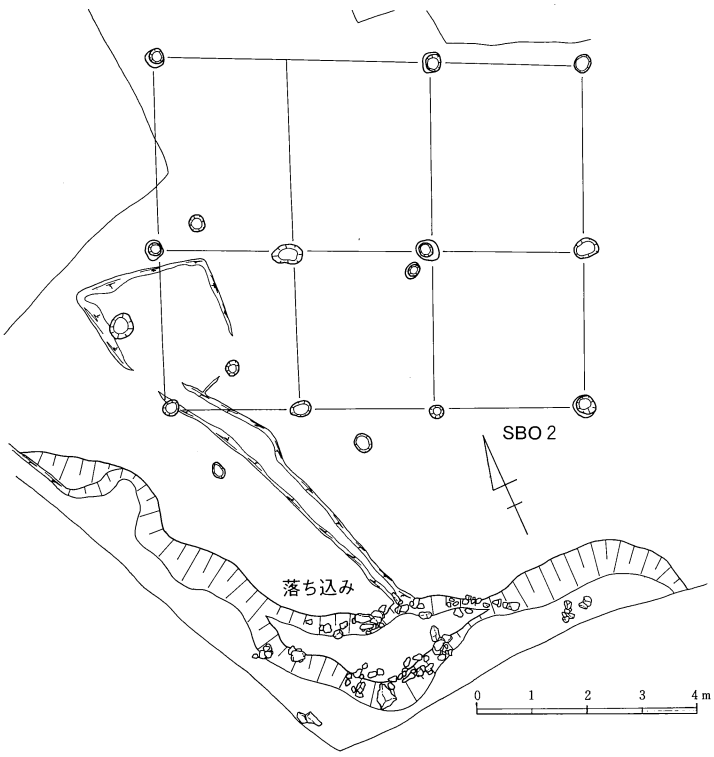
溝１

Ａトレンチ西端にて検出した。概ね東西に向いており、規模は幅１ｍ、深さ40㎝を測り、断面形状は逆台形となる。掘立柱建物跡１に付随する堀状の区画と推定される。

遺物(３)は丹波焼椀である。体部は内彎しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は軽くつまみ上げ、尖り気味に仕上げている。成形技法は粘土塊からのロクロ挽き上げと思われる。内面に淡緑色の自然釉を被る。溝１の上面より出土している。

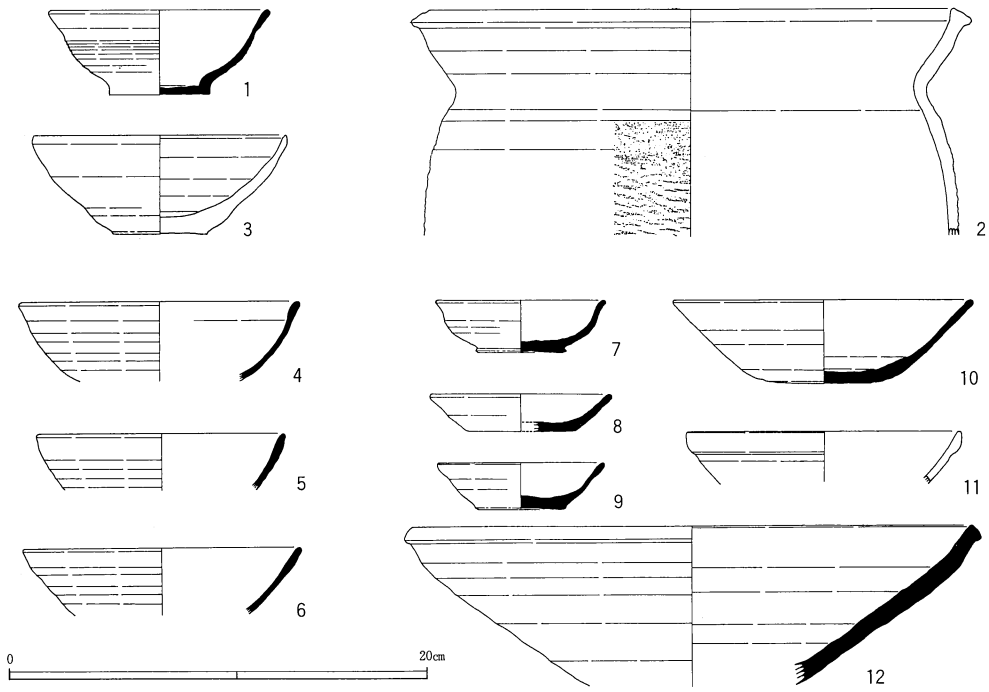
掘立柱建物跡２（ＳＢ－２）

調査区北西部に位置する。Ｈトレンチにおいて確認した。規模は桁行３間（7.8ｍ）、梁行２間（6.4ｍ）で床面積約50㎡を測る。桁方向を東南～北西(Ｎ65°Ｗ)にとる。柱穴の掘り方は径約20㎝～40㎝の不正円形を呈する。柱痕は25㎝前後である。基本的には総柱であるが、北側桁行の西から２本目の柱は検出されなかった。



第30図　Ｈトレンチ平面図

遺物は柱穴から出土している。(４・５・６)は須恵器椀である。(４・５)は体部が内彎気味に立ち上がり、(４)は口縁部が肥厚する。(６)は体部が外方に立ち上がり、口縁部は若干肥厚する。３点ともロクロナデ調整を施す。(７・８)は須恵器小皿で(７)は底部に平高



第31図　井根口遺跡出土遺物

台をもつ。体部は内彎し、口縁部を外方へつまみ出す。(8)は体部が外方へ立ち上がり、端部を丸くおさめる。2点ともロクロナデ調整し、底部は回転糸切りである。(11)は白磁椀で口縁部を玉縁化する。

落ち込み

Hトレンチ西南端において検出した。掘立柱建物跡2に関連すると推定される。肩部および周辺に拳大～人頭大の礫が散乱しており、護岸に伴う石組みが存在したと考えられる。

遺物(10)は須恵器椀である。高台の付かない平底椀で、底部は回転糸切りである。体部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。(9)は須恵器小皿である。体部で一度器壁が薄くなり、口縁端部で肥厚する。底部は回転糸切りである。(12)は須恵器片口鉢である。体部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁部で若干内彎する。端部は平坦な面をもつ。

第4節　小　　結

有安遺跡では平安時代末期～鎌倉時代に属する遺構及び遺物の出土をみた。遺物では丹波焼は器種をみると椀、堝、鉢、羽釜など雑器が主流であり、総じて三本峠周辺の窯跡群で焼成された製品と考えられる。とくに椀は三本峠北窯跡出土遺物に近似したタイプがあり、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期が与えられる。[①] また鍋、羽釜は摂津、播磨地域では同タイプで土師質

の製品が出土しており、丹波系陶器と土師質系土器において技術的な関連性を示す資料である[②]。土坑及び包含層出土の須恵器鉢は神出古窯跡釜ノ口支群出土遺物に類似性が認められる。森田編年ではⅡ期の2段階に相当すると考えられる[③]。

井根口遺跡では掘立柱建物跡1の柱穴より出土した椀(1)と同タイプの製品が西脇市鍋子谷1号窯跡の出土遺物にみられ、11世紀後半の年代が与えられている[④]。他に年代の明確な遺物はなく、掘立柱建物跡1の年代は同時期まで遡る可能性がある。掘立柱建物跡2の遺構から出土した須恵器のうち椀(6)小皿(7)鉢(12)は三田市井ノ方窯跡窯体内及び包含層出土遺物に類例が認められる[⑤]。掘立柱建物跡2は遺物の年代から平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される。

調査地以外の周辺遺跡としては、住吉神社社殿裏経塚がある。塚内出土遺物には、外容器に使用された東播系須恵器甕、片口鉢があり、平安時代後期の年代が与えられている[⑥]。また、調査地北部に隣接する山麓に南面して水谷山中世墓群が築かれており、傾斜地には一石五輪塔が数基遺存している。調査地奥の小谷部に南面する傾斜地にも一支群あり、一石五輪塔のほか蔵骨器とみられる丹波焼壺片が出土している。両墓群とも年代は室町時代後期と思われる。

以上のように有安遺跡、井根口遺跡は、小野原庄の核をなす住吉神社の周辺集落として当社と密接な関係を持つと考えられるだけでなく、当地域が丹波、播磨への交通の要衝であった点を考え合わせると小野原庄内にあって重要な位置を占めていたといえる。

註)

① 大村敬通「三本峠北窯跡調査報告書」(遺物資料編) 1980 兵庫県教育委員会

② 神崎勝他「神出－神出古窯址群に関連する遺跡群の調査－」1986 妙見山麓遺跡調査会
岸本一宏他「溝ノ尾遺跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』1988 兵庫県教育委員会

③ 「昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報」1983 神戸市教育委員会

④ 岸本一郎「播磨・緑風台窯址」1983 西脇市教育委員会

⑤ 岸本一宏他「井ノ方窯跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』1988 兵庫県教育委員会

⑥ 特別展『願い・かなえ・たまえ』特展図録No.22 1990 兵庫県立歴史博物館

第5章　まとめにかえて

井根口遺跡は、北限を水谷山に、西限を県道下立杭柏原線、東限を住吉神社、南限を国道372号線に画された範囲に展開する集落遺跡である。今回兵庫県教育委員会が調査した地区からは棟軸をほぼ同一方向にもつ3×4間の掘立柱建物跡が3棟検出された。うち掘立柱建物跡2・3は建て替えが行われており、出土した土器、調査所見から掘立柱建物跡2から3への建て替えが想定される。建て替えに伴い、建物の規模は北側に若干拡張されている。調査区の西端より検出された掘立柱建物跡1は、仮に南北方向を棟軸とすると掘立柱建物跡2・3とほぼ同一方向を示す。掘立柱建物跡1・2からは平安時代末から鎌倉時代、掘立柱建物跡3からは鎌倉時代後半の土器が出土している。各建物跡の棟軸方位がほぼ同方向であることを考え合わせると、これらの建物跡はおおよそ平安時代末から鎌倉時代にかけて存続した建物跡群と推察される。これらの建物跡以外に幾つかの柱穴があり、他に建物跡が存在した可能性がある。これらの柱穴からは南北朝時代に比定される土器も出土しており、今回調査した地区では南北朝時代まで集落が存続していた可能性が考えられる。

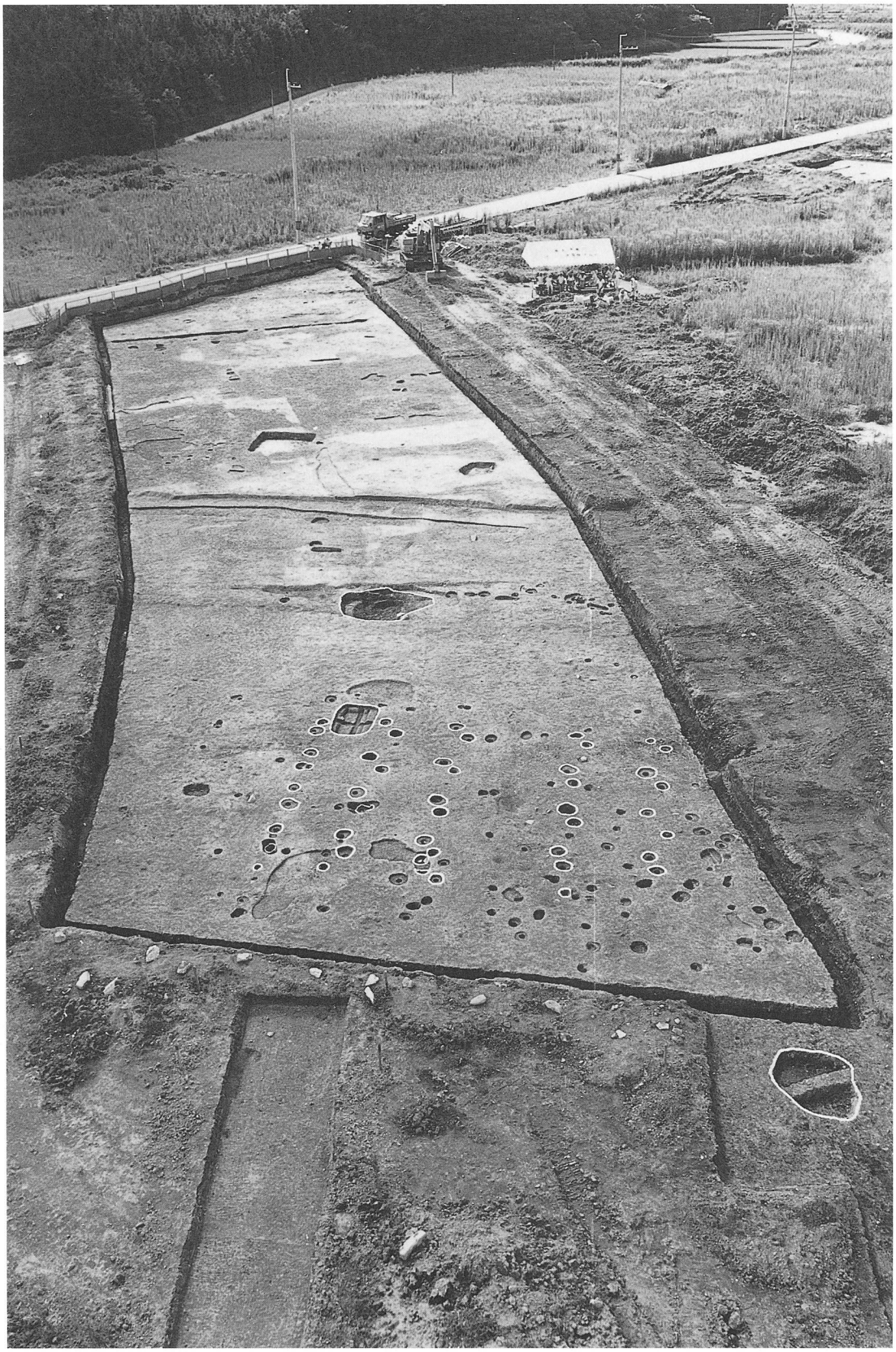
これらの建物跡以外に、木棺墓が1基検出されている。この木棺墓は掘立柱建物跡2・3の南西隅に長軸を東西方向にもつ形で検出された。この木棺墓は位置関係から判断すれば掘立柱建物跡2・3の「屋敷神」のような有機的な関係が考えられるが、木棺墓墓壙内から出土した土器は14世紀代のものが出土しており、建物跡より時期的に新しいものである。ただ柱穴群とは時期的に重なるため、あるいは消滅した建物跡に関係する木棺墓として機能していたのかもしれない。井根口遺跡は、今回調査した以外に今田町教育委員会によって確認調査が実施されている。調査の詳細は今田町教育委員会の御好意で本報告書第4章にその概要を掲載している。今田町教育委員会の調査成果と今回の調査成果を合わせたものが第3図である。今田町教育委員会の調査で井根口遺跡内より3箇所で遺構が検出されている。Hトレンチでは棟軸を東西方向にもつ2×3間の掘立柱建物跡が検出されている。時期は平安時代末から鎌倉時代に比定されている。Aトレンチでは棟軸を北よりやや西にもつ2×3間の掘立柱建物跡が検出されている。時期は他の掘立柱建物跡より古い様相をもち、棟軸方位も異なる。また105グリッド拡張区からは素掘り井戸と思われる穴と柱穴群が検出されている。これらのトレンチとは別に井根口遺跡の南、国道372号線を隔てた有安遺跡では地割り溝をもつ平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出されている。調査区が狭小なため建物の規模は不明瞭であるが、柱穴の大きさから判断して井根口遺跡で検出された建物跡よりも大型のものと推察される。

井根口遺跡における建物は2×3間ないしは3×4間の小規模な総柱建物で、四斗谷の微高地上に点在する点が特徴である。ただ近接する有安遺跡の建物は大型のものと推察され、井根

口遺跡の建物とは構造・規模の点で異なる。現時点では住吉神社の東側、辰己地区の調査が実施されていないため憶測の域をでないが、おそらくこの建物が住吉神社を中心とした集落のなかで重要な機能を果たしていたと考えられる。この建物を中心として本調査区掘立柱建物跡１・２、Ｈトレンチ建物跡が四斗谷に展開し、集落を構成していたと考えられる。その後、掘立柱建物跡３、柱穴群(消滅した建物)と続き、集落の規模は縮小していったものと思われる。第２章第２節で述べたように、鎌倉時代から南北朝時代は小野原庄内における住吉神社の荘園支配が崩壊し始める時期にあたり、14世紀後半には小野原庄は清水寺の勢力下に組み入れられる。このような歴史的背景のなかで、住吉神社の衰退に符合するように集落が縮小していく現象は、井根口遺跡の集落が「蛙ノ宮」住吉神社と深い繋がりのなかで成立、存続したことを裏付けている。

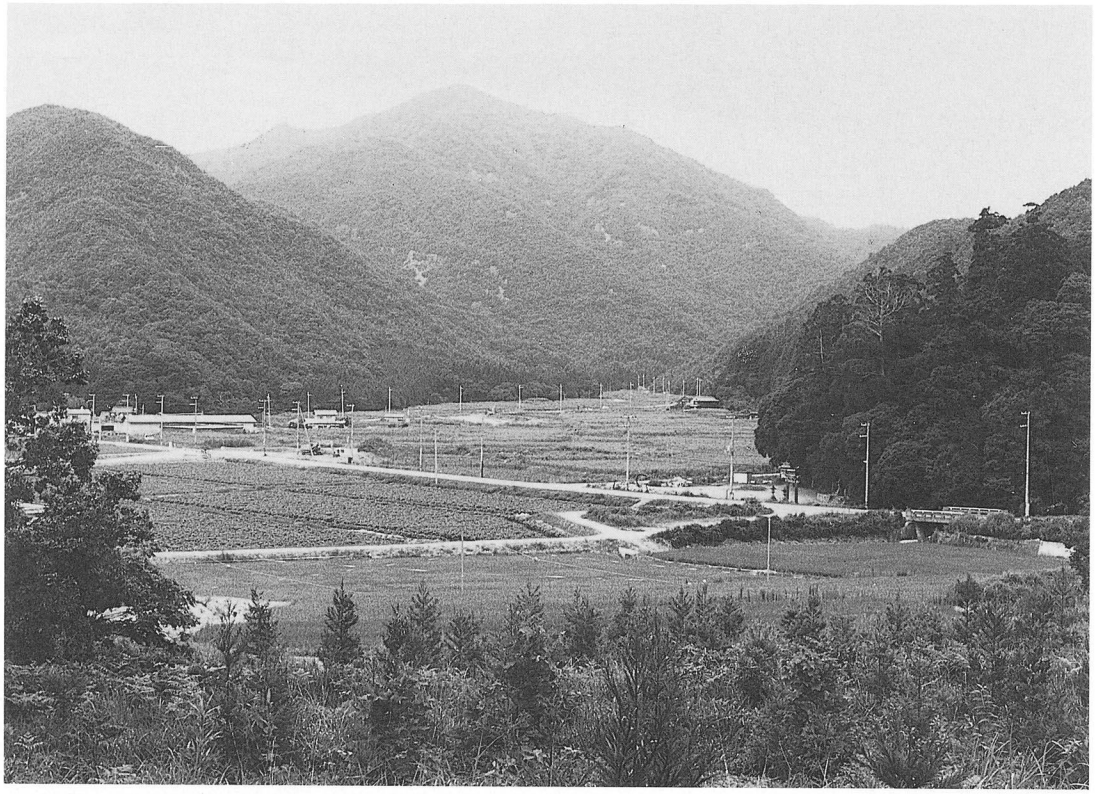
井根口遺跡から出土した遺物は、須恵器、土師器、瓦器、丹波焼、中国製磁器と多様である。なかでも丹波焼は遺物出土量の５％を占めている。丹波焼の器種をみると、現在のところ消費地では出土例のない椀が数点出土している。このことは椀等の小型の日常雑器は地元を中心とした限られた地域でのみ消費されていたことを示唆している。いいかえれば住吉神社と深い繋がりのなかで成立した井根口遺跡で丹波焼の椀が消費されている事実は、丹波焼の成立が住吉神社と深く関わっていることを物語っている。

図　　版



調査区全景（北東から）

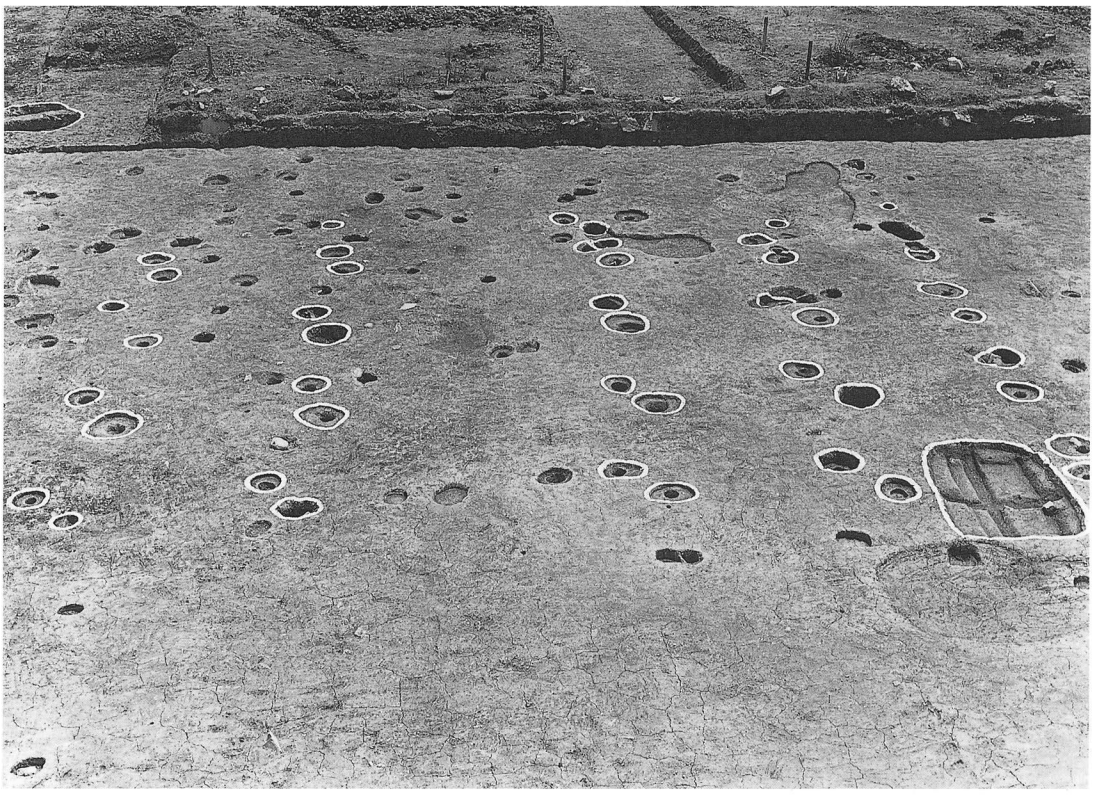
図　版 Ⅱ



1．調査区遠景（南東から）

2．調査終了後全景（東から）

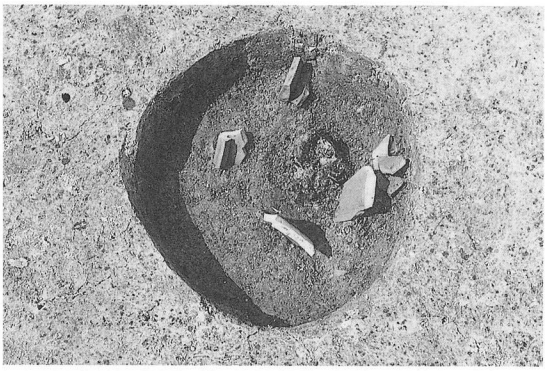
1．掘立柱建物跡１（東から）



2．掘立柱建物跡２・３、柵（西から）

図　版 Ⅳ

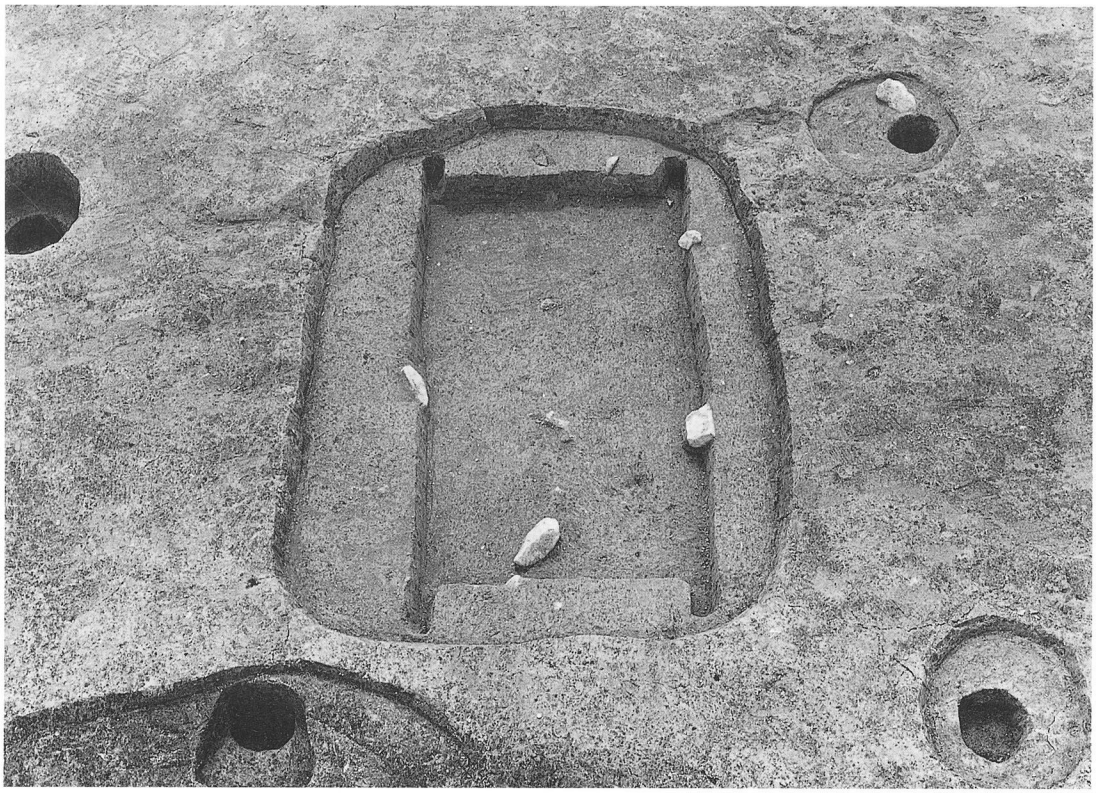
1．掘立柱建物跡１・P10（東から）



2．掘立柱建物跡３・P37（南東から）

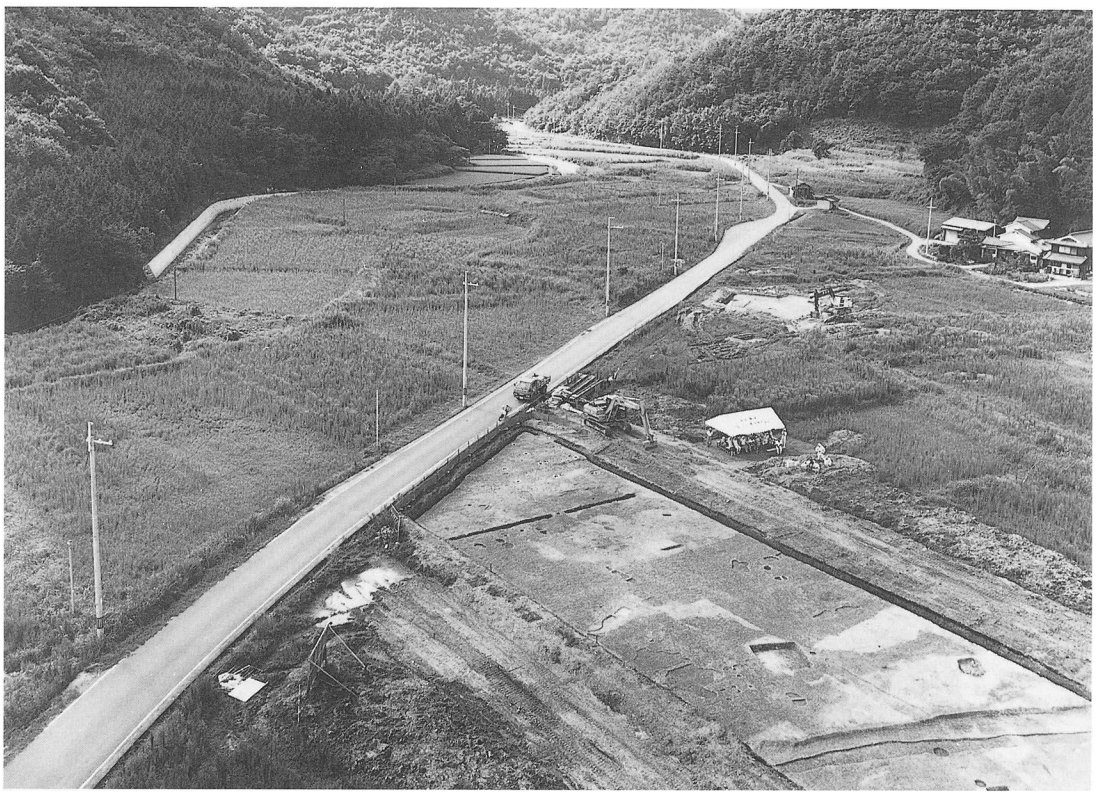
3．掘立柱建物跡３・P36（南から）

4．掘立柱建物跡３・P44（南西から）



5．木棺墓検出状況（西から）

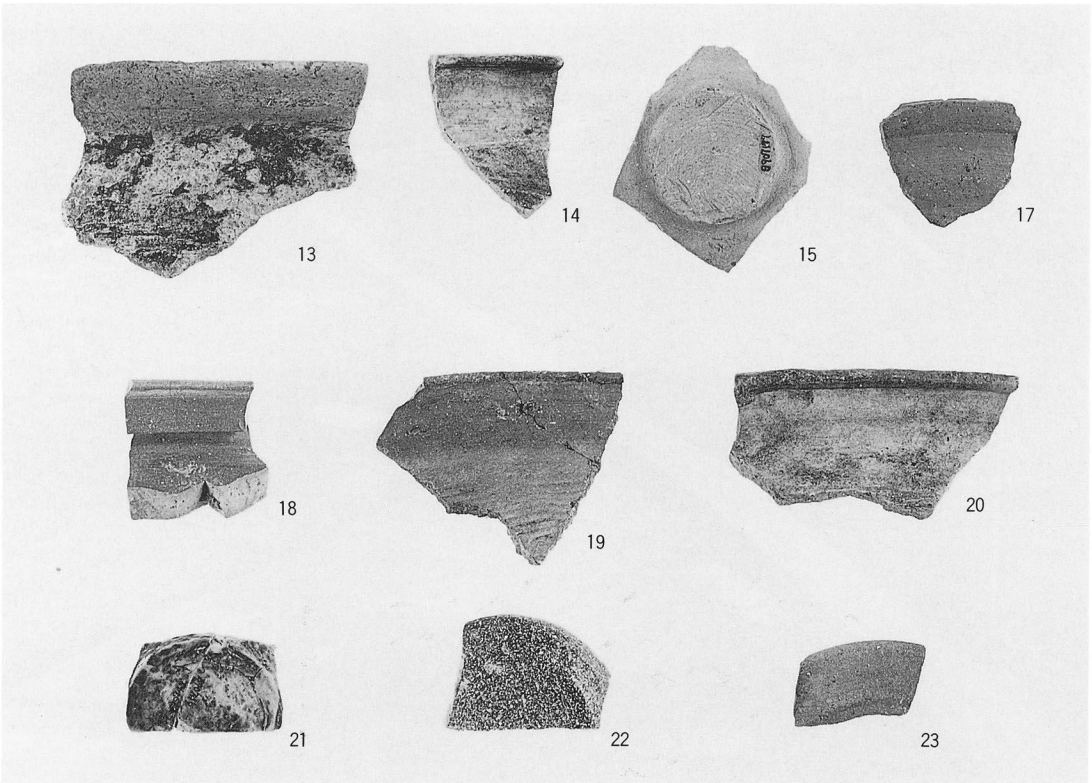
1．土　坑２検出状況（北から）



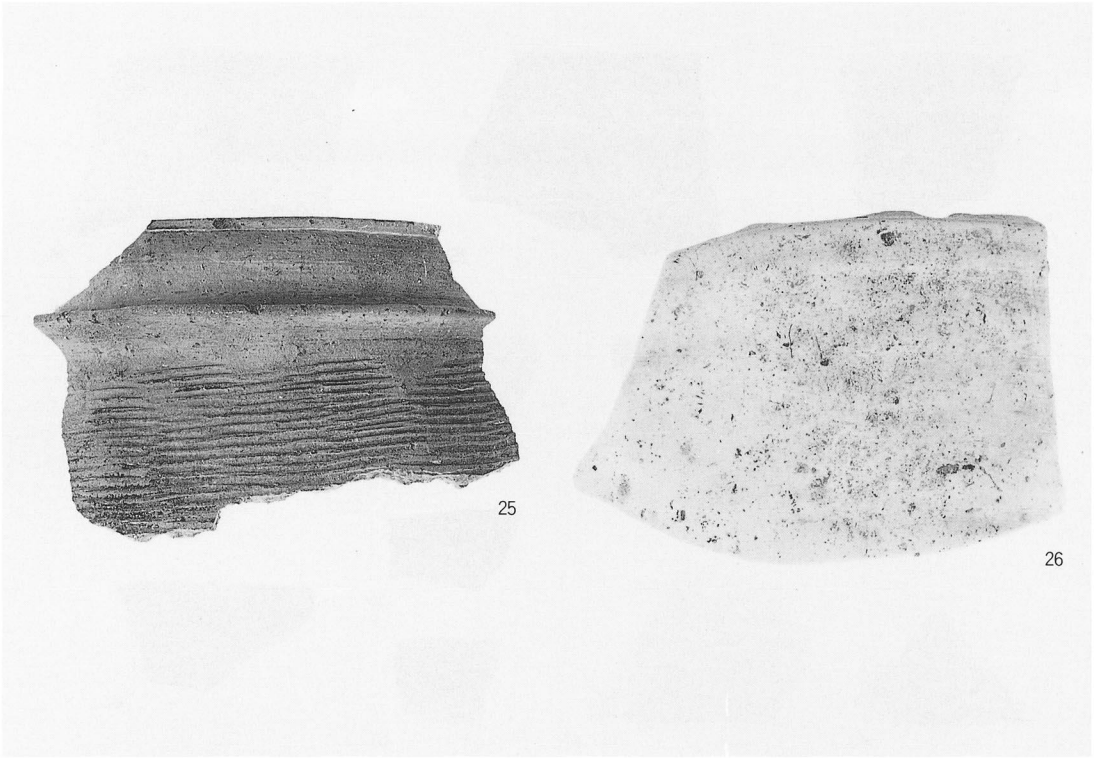
2．調査区と四斗谷遠景（南東から）

図　版 Ⅵ

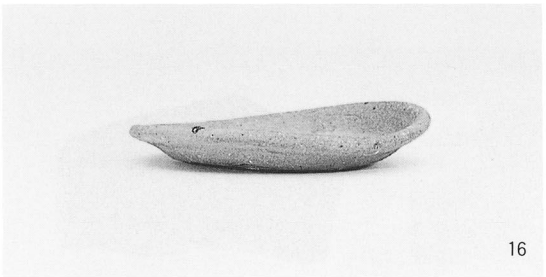
1．掘立柱建物跡１（２～４）、掘立柱建物跡２（７～12）出土土器



2．掘立柱建物跡３（13～15、17～18）、その他柱穴内（19～23）出土土器



1．その他柱穴内出土土器



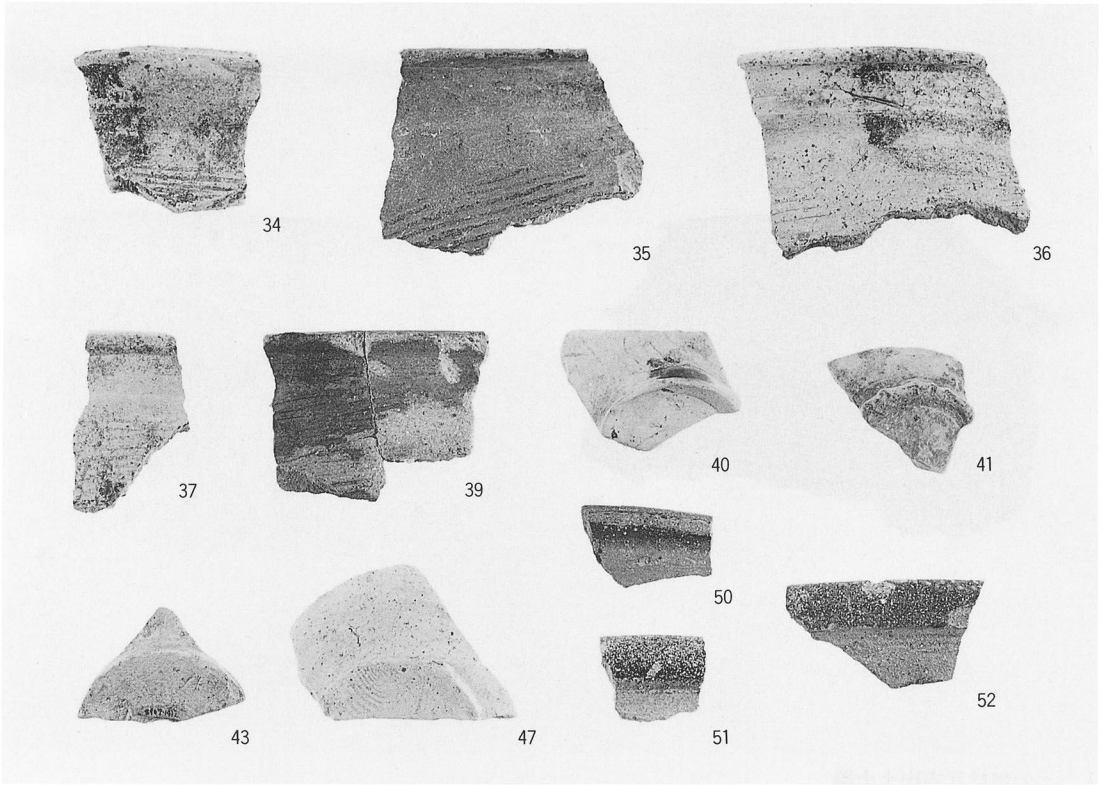
2．掘立柱建物跡３出土土器

4．遊離土器

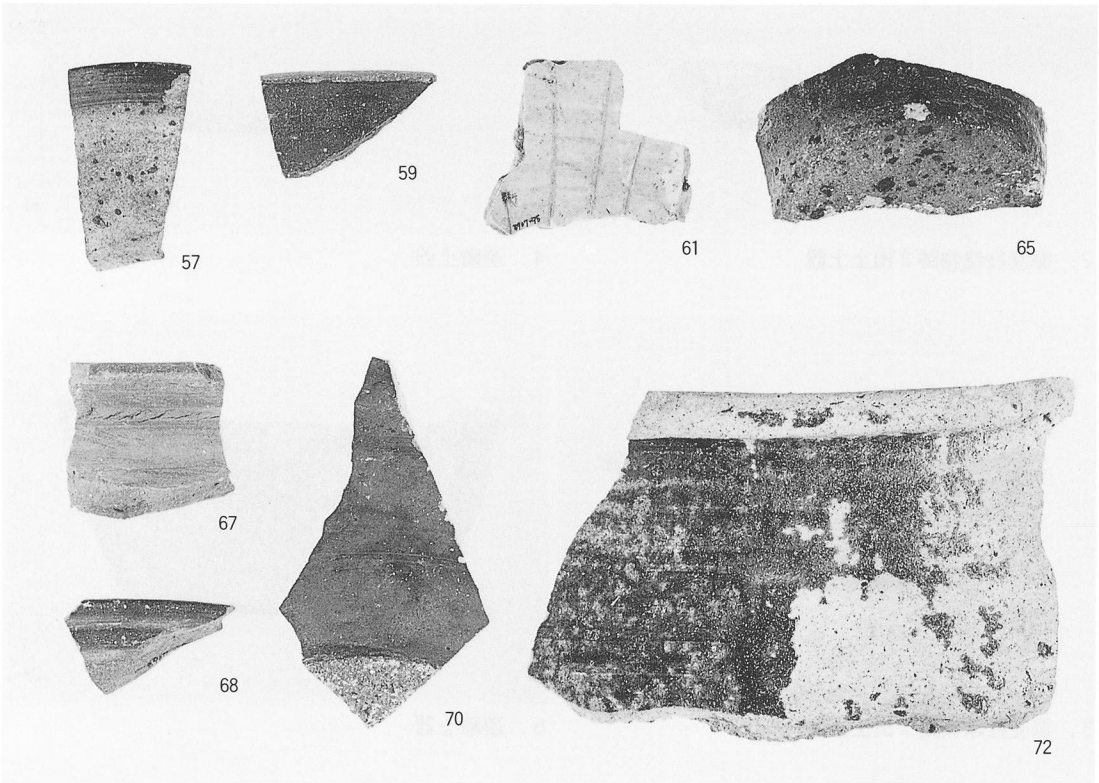
3．掘立柱建物跡１出土土器

5．遊離土器

図　版 Ⅷ



1．遊離土器



2．遊離土器

1．鉄製品

兵庫県文化財調査報告書　第82冊

井根口遺跡発掘調査報告書

－一級河川四斗谷川改良工事に伴う発掘調査報告書－

平成２年12月28日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５
（TEL. 078-531-7011）

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　水山産業株式会社
〒653 神戸市長田区二番町３丁目４－１